

本

種別	種別	函控號
3413	修	上ノ
號		號

二

修

151
724
Vol 2

日本立志編

一名脩身短範 三版
千河岸貫一著述

二

千河岸貫一著

日本立志編
一名脩身規範

板權所有 雙書房合梓

日本立志編卷二目次

彦立校
中藥部
印章

- 第一 源義家兵法ヲ學ヒシ事三
- 第二 越前以將帥ヲ觀テ號泣セラレシ事五
- 第三 中江藤樹大學ヲ讀ムテ嘆悟セシ事六
- 第四 長沼宗敬儒學ニ志シ兵學ヲ窮メシ事九
- 第五 熊澤了介學ニ志シ良師ヲ求メ大ニ其業ヲ成スニ至リシ事十一
- 第六 岡崎季民志ヲ隣家ノ弦聲ニ激勵セシ事十三
- 第七 公松三介勤苦志ヲ求メシ事十五

第八 新井君美貧ニシテ志氣ヲ撓屈セザリシ事

二十丁

第九 三宅正名同九十郎貧ニシテ苦學セシ事

二十一

第十 物徂徠遠志ヲ抱キ一代ノ儒宗タリシ事

二十二

第十一 雨森芳洲年八十一始テ和歌ニ志セシ事

二十三

第十二 太宰純菅麟煥ヲ規セシ文

二十六

第十三 吉益東洞貧窶ニシテ毫モ志ヲ折カザリシ事

二十七

第十四 杉山某明ヲ失シテ鑿ニ志シタル事

二十八

第十五 谷玄圃明ヲ失シテ後ヲ詩學ニ志セシ事

二十九

第十六 佐久間彦四郎年卅六ニシテ學ニ志セシ事

三十五

第十七 小川信成勸學文ヲ臨摸シテ學ニ志セシ事

三十六

第十八 山中儲平告ケスシテ桑梓ヲ離レシ事

三十八

第十九 石作貞十九ニシテ始メテ學ニ志セシ事

四十

第二十 田邊布文孟子ヲ講スルヲ聞キ志ヲ立テシ事

四十一

第二十一 永富鳳介幼ニシテ古人ノ節ヲ慕ヒシ事

四十二

第二十二 宮瀬維翰乞食シテ江戸ニ入リシ事

四十三

第二十三 富士谷成章志ヲ專ラニシテ國書ヲ討究セシ事

四十五

第二十四 藤鈞寫生ノ妙訣ヲ自得セシ事

四十六

第二十五 休翁晚年國歌ニ志セシ事

四十七

第廿六 糟谷半之丞篤志ニ由テ國風ニ長セシ事 甲九下

第廿七 佐藤隆興義章ノ衣ヲ被ルヲ誓ヒシ事 甲九下

第廿八 山岡紀一郎志ヲ槍法ニ專ラニセシ事 甲九下

第廿九 藤田斌卿年弱冠ヲ踰工テ學一志セシ事 甲九下

第三十 小川計次郎學文ヲ淵熟ニマシムル事 甲九下

第三十一 山中隆平學武ヲ精ニシテ其行ヲ顯ルル事 甲九下

第三十二 田中亦文正千ヤ精メルヲ聞ク事 甲九下

第三十三 百重貞十其志ヲ守ルル事 甲九下

第三十四 山中隆平學武ヲ精ニシテ其行ヲ顯ルル事 甲九下

第三十五 小川計次郎學文ヲ淵熟ニマシムル事 甲九下

第三十六 田中亦文正千ヤ精メルヲ聞ク事 甲九下

日本立志篇卷二

千河岸ノ賈一ノ撰述

養志ノ部

志ヲシテ恆ネニ存セシムルハ身ヲ立ルノ基本ナリ
トヲ叙ス

凡ソ人ノ爲スアル、必ズ先ツ之ヲ爲スノ前ニ當テ、將サニ
之ヲ爲サントスルノ志アリ、苟モ其志無キ、恰モ鏡ヲ設ケ
テ射ルガ如シ、而シテ其志ス所岸近ナル者ハ、其至ル
所亦岸近ニシテ、其志ス所高且ツ大ナル者ハ、其遠スル所
亦高且ツ大ナリ、故ニ古來有爲ノ士ハ、必ズ少ニシテ高遠
ノ志ヲ懷キ、終ニ常人ノ到ル能ハザルノ地位ニ達ス、然レ
バ則チ人間百ノ事業、志ヲ以テ基礎トセザルハ、無ク殊ニ

惟今世ノ人士志嚮先づ定ラズシテ、或ハ製造物産ヲ興
 殖セントシ、或ハ商估貿易ニ從事シテ利ヲ得ントシ、或ハ
 文章議論ヲ以テ一世ニ鳴ラントシ、朝々ニ攻々スル所ノ
 事モタベニ已ニ之ヲ厭棄シ、昨ノ敢テ觀ミザリシ所モ、今
 ハ頗ル思念ヲ傾ク、是恰カモ基礎無キノ建築、如シ、假令
 結構宏大ナリト雖、忽チ風雨ノ爲メニ傾覆シ破壊セン
 ハシ、夫レ人ノ志ハ、之ヲ養ハザレバ長ゼズ、況ヤ社會ノ風
 潮ニ簸蕩セラレ、其志ヲ挫折スルヲヤ、嫩芽ヲ摘盡シテ、其
 艸木ノ長生ヲ望ムト何ゾ殊ナラン、而シテ志漸ク長大ナ
 ルニ及テハ、勢力當ル可カラズ、三軍帥ヲ奪フベシ、匹夫其
 志ヲ奪フベカラズトハ、此之謂ナリ、且夫世人ガ、動モスレ
 バ、眼前ノ小利ニ眩シ、小安ヲ謀リ、終ニ小成ニ安ンズル者

ハ、他無シ、或時ハ高遠ナル志ヲ起スアリト雖、久シク之
 ヲ保持セザルニ坐スルノミ其心ニ放テ、大ニ欲スル所ノ
 者アツテ存スレバ、何ゾ區々タル利益ト、快樂トニ拘泥ス
 ルニ暇マアランヤ、而シテ其志ヲ保持スルニ就テハ、其眼
 ニ遮リ、其耳ニ觸ル、所ノ者ヲ取テ、以テ之ヲ培養シ、之ヲ
 長大ニスルノ工夫ヲ爲サ、ル可カラズ、本篇ニ列叙スル
 所ノ者ハ、則チ前者先輩ノ志ヲ立テ、之ヲ保持セシ所ノ
 事蹟ニシテ、人世事業ノ基礎ヲシテ、牢固ナラシメザル可
 カラザルヲ證明スルニ足ル者タリ、冀クハ今世ノ人士ガ、
 志ヲ移動シ易キノ痼病ヲ療スルノ藥石ト爲リ、後進ノ輩
 ガ、其志ヲ培養スルノ肥糞ト爲ランヲ。

源義家ハ伊豫守頼義ノ長子ナリ。幼名源太。八幡太郎ト稱ス。人ト爲リ勇決英果ニシテ、騎射神ノ如シ。頼義ニ從テ安倍貞任ヲ陸奥ニ擊テ之ヲ誅ス。康平六年、功ヲ以テ從五位下ニ叙シ、出羽守ニ任ズ。嘗テ京師ニ在リ、關白頼通ノ謀ヲ過ギ、陸奥ノ戰爭ヲ談ズ。博士大江匡房、別室ニ在リ之ヲ聞テ曰ク、好男子、惜クハ未ダ兵法ヲ知ラズ。從者微カニ其語ヲ聞キ、慍テ義家ニ語ル。義家曰ク、其或ハ然ラント。匡房ノ出ルヲ見、其車ニ就テ之ヲ拜ス。遂ニ就テ學ブ。永保三年、陸奥守ニ任ジ、鎮守府將軍ヲ兼ヌ。時ニ藤原家衡、藤原清衡ト、清原真衡ト、女ヲ攜フ。義家急ニ任國ニ赴キ、真衡ヲ助ケ、家衡ヲ出羽ニ攻メテ利アラズ。家衡ノ叔父武衡モ亦家衡ニ應ヂ、兵ヲ合セテ金澤ノ柵ニ據ル。寛治元年、義家自ラ數萬

騎ヲ率中、之ノ攻メ、柵ヲ崩シ、數里ヲ進メ、行ヲ變ル。三ミ見テ曰ク、是レ必ス伏フルナリト、之ヲ搜ムレバ、果シテ然カリ。俄ニ謂テ曰ク、兵法ニ言フ鳥獸ハ、者ハ伏ナリト。我レ學バザレバ、則チ殆シ。第義光ノ京師ヨリ來ルニ會ス。義家大ニ悦ビ、カヲ戮ハセ、柵ヲ攻メテ之ヲ屠ル。陸奥出羽悉ク平ク。義家父祖ノ業ヲ兼ケ、善ク將士ヲ撫ス。其陸奥ヲ征スル、前後十二年。東國ノ民皆其恩威ニ服シ。稱シテ八幡公ト曰フ。

櫻所子曰ク、義家朝臣ノ兵法ヲ江帥ニ問ヒ、雁行ノ亂ルヲ見テ伏アルヲ知リタル事實ノ如キハ、周ヨリ人口ニ贈笑スル所ニシテ、喋々論評スルヲ須キズ。然リト雖、臣閉目沈思シテ、當時ノ光景ヲ追憶セバ、義家結屐シテ東征シ、節

風沐雨。九年、戰鬪ヲ經テ遂ニ凱旋シ、一日荒道ヲ關白ノ
前ニ於テ、戰功ヲ説ク。從卒博士ノ言ヲ聞キ、劍ヲ投シテ其
答口ヲ懷ル。亦宜ナリ。然ルニ義家、敗テ分テザルノミナラ
ズ、其鈴論ニ違キヲ知ルヲ以テ、車下ニ磐折ス。夫レ江帥ハ
三朝ノ侍讀トシテ、從三條天皇ノ即位ニ及ビ、替リニ弊
政ヲ革ム。治ヲ延喜ノ隆時ニ比スルニ至リシモノ。與カッ
テカアリト稱ス。然レバ則チ江帥ノ誨エル所、帝ニ風雲正
奇ヲ極ムルノミナラスシテ、義家ノ封、亦固ヨリ徒ニ父ノ
書ヲ讀ムノ類ニ非ズ。應サニ學ブ所、伏ヲ察ルヨリ大ナル
者アルヤ、疑ヒヲ容レザルナリ。而シテ其惟行ノ亂ル、ヲ
見テ、代ヲ知リシカ如キハ、固ヨリ偶然ナルモノ。且ツ夫レ
義家十有二年ノ征役ニ從事シ、八州ノ精銳、其指麾ニ從フ

地歩ヲ占ムルモ、位正四位下ニ遷キ、官鎮守內將軍左衛
門督タルニ遷キ、又ト雖モ、以クモ不滿ノ色無キモノ。蓋ニ
耐忍ノ力、他ノ武勳アル人々ニ超過スル者ニ非ズヤ。而シ
テ其基業裔孫ニ及ビ、朝野ヲ錮食ニ開クニ至リシ者、亦此
耐忍ノ餘慶ト謂フベシ。功高フシテ官ノ昇キヲモ、敢テ慎
驚ヲ懷カザルノ氣象ハ、江帥ノ好男子、未ダ兵法ヲ知ラズ
ト云ヒシトヲ從者ニ聞クモ、敢テ怒ラズ。其出ルヲ見テ、車
下ニ磐折スル事ニ於テ之ヲ見ルニ足レリ。嗚呼、英武義家
ノ如クニシテ、耐忍義家ノ如クナル、子孫必ズ興ル者アラ
シトハ、遺言、果シテ空シカラザリシモノ、亦故アルナリ。今
ヤ開明ノ隆運ニ屬シ、知識ヲ殊邦異域ニ求メラル。然ルモ
猶古世ノ人士、事務家ト理論家ト、互ヒニ相嘲ケリ。即チ事

尋家ハ理論ハ則チ然リ。然リト雖氏未ダ實際ニ適合セザルナリ。我曹ハ曾テ經驗スル所ナリト云フハ語ヲ以テ、論士學者ノ言ヲ遮斷スルノ堅塞トシ、理論家ハ今古中外ノ史典ヲ引テ、事正理ニ契ハザル者ハ永遠ニ行ハルベキ者ニ非ス。苟且淺漫ハ事務家ノ習弊ナリト云フハ言ヲ以テ、之ヲ刺衝スルノ鍼砭トス。其見ル所各一方ニ偏シテ、然ニ氷炭相容レザルヲ致ス者ノ如シ、之ヲ義家ノ兵法ヲ江帥ニ問フニ比スレバ、其度量ノ廣狹、日ヲ同フシテ辨ルベキニ非ス。何況ヤ已レガ勲功ニ誇コリ、偶其論ノ恟ハザルノレバ、直チニ官ヲ罷メ去テ、私カニ黨與結合シ、私憤ヲ干ヤニ前ツルモノ、前後相踵キタルガ如キ、其首魁タル者、何ノ義家ニ爲ス所ヲ追思シテ、愧死スルヲ知ラザリシヤ。夫

レ古ヲ尊ビ今ヲ賤ムハ東洋諸國ノ通弊ノリト雖、徒ニ今ヲ尊ムテ古ヲ賤ム、亦其弊無キ所非ス。試テ内視ユ、勇決英果ヲシテ、而シテ耐忍勉強ナク、義家ノ如キハ、今世ト雖、其容易ク得ベカラサルナリ、容易ク得ベカラサルノミナラズ、之ヲ學ブ者ト雖、亦得易スカラス。徒ニ今ヲ尊ムテ古ヲ賤ムガ如キ、我ハ厭セズ。其弊ハ、
第三曰、越前少將舞臺觀ヲ辨泣セフレシ事、
天正時代、彼阿國ト稱スル者アリ、妙麗ニシテ善ク舞フ、名京畿ニ噴カタリ、少將秀康乃伏水ニ在ル、其技ヲ觀ント欲シ、召シ疾之ヲ客館ニ致ス、阿國頸ニ繫ルニ水晶ノ念珠ヲ以テス、少將其品ノ稱ハザルヲ意シ、珊瑚ノ念珠ヲ賜ヒ以テ之ヲ寵ス、既ニシテ阿國進ムテ其技ヲ奏ス、羅衣風ニ從

長袖交横ハリ其宛轉ノ状ヲ極ム少將凝視スル者久シ
因ラ大ニ歸泣ス左右惟ムテ其故ヲ問フ少將乃チ曰ク渠
裙釵ノ添上雖氏既ニ天下第一ノ名ヲ成ス我々則チ堂々
タル一丈夫ニシテ曾テ海内一人ト稱セラルルヲ得ズ豈
能ク羞テ泣カザランヤト
按所子曰ク大丈夫ノ志ノ立ル所謂軍人君子英雄豪傑ノ
言行ヲ聞クヲ以テノミナラス其耳目ニ感觸スル所皆以
テ其志氣ヲ激勵スルニ足ル少將ハ豪邁ナル上杉景勝カ
天下ノ勁敵ト稱スルモ自ラ一人ヲ以テ之ニ當ランコトヲ
請ヒ誓テ白川ノ關ヲ越セバ一城ヲラシメス然レト雖モ
當時勇武老練其人ニ乏シカラズ少將未ダ海内一人ノ聲
興ヲ得ル能ハズ是レ一舞故ヲ觀ル亦以テ其豪壯ノ氣ヲ

激發スル所以ナリ古語曰ク君子ハ義ニ喻トリ小人ハ
利ニ喻トリ下以將ヲ如キ武夫ハ則チ勇ニ喻トルト謂フ
ベキナリ今世俳優講談師等ハ如キ天下第一ノ名ヲ擲ス
ル者アリ學術技藝ヲ講究スル人其技ヲ見其名ヲ聞キ在
チ其又流チ發憤激勵スルヲバ必ず功名ヲ成スノ日ア
ルベシ宜ク其好ム所ニ就テ喻トル所アルベキナリ何ゾ
必ズシモ小人君子武夫ノ利ト義ト勇トニ喻ルアルノ令
ノランヤ

第三 中江藤樹大學ヲ讀ムラ嘆悟セシ事

中江藤樹小字ハ與右衛門其祖ハ加藤侯ノ臣ニシテ其父
ハ農ニ隱ル祖ニ先テ没ス祖乃チ藤樹ヲ拉シテ伊豫ノ大
洲ニ之ク藤樹童巾ニシテ老成ノ如シ年甫メテ十一日

大學ヲ讀シテ、夫子曰、以テ成人ニ至ル、壹ハ是ハ皆テ身ヲ
修メ、ルヲ以テ本、爲ス、ト云フ、至リ、嘆息、以テ曰ク、幸ニ此
經ヲ全ク存スル、聖人豈ニ學ムテ至ル可カラザル者ナラ
ンヤ、ト、年十七、京師ハ僧來テ論語ヲ講ス、是時ニ當リ、大洲
ノ俗、惟武弁是レ競ヒ、敢テ從學スル者無シ、獨リ藤樹、日夕
往テ聽ク、僧居ル所、僅カ二月餘ニシテ去ル、因テ四書大全
ヲ得テ之ヲ讀ム、而シテ往々僚友ハ爲メニ褒謗セラル、是
ニ於テ晝ハ則チ深ク之ヲ藏メ、夜ニ至テ始メテ卷ヲ開ク、
藤樹躬行ヲ先ニシテ、文詞ヲ後ニシ、毎ニ四民ヲ引テ之ヲ訓
誨ス、人賢愚ト無ク、皆其徳ヲ服シテ、善ニ興起セザルハ無
シ、爲學修行ヲ以テ聲名海内ニ施ク、大洲ヲ去テ近江ニ來
リ、母ヲ養フニ及ビ、公侯辟召シ、玉帛禮ヲ貝璣メ之ヲ聘ス

レ、氏、嘆拒シテ應ゼズ、鄉黨里閭、皆チ其徳ニ慕シ、商賈ト雖
モ得ルヲ見テ、義ヲ思ヒ、旅舎茗肆ノ若キ、客遺ル、所ノ物
アレバ、則チ必ス之ヲ關シニ置キ、以テ遺者ノ復々來ルヲ
俟ツ、年ヲ暨ルノ後、多塵土、盆滿スルニ至ル、雖竹屨也ノ類
ト雖、氏、竟ニ取用セス、其此ノ如クナルヲ以テ、鄉閭舉ゲテ、
藤樹ヲ尊稱シテ、聖人ト爲ス、其聖人豈ニ學ムテ至ル可カラ
ザル者ナランヤ、ト言果シテ驗アリ、
某州ノ一士人、藤樹ノ故里ヲ經過シ、其墳墓ヲ弔セント欲
ス、路ヲ農夫ニ問フ、農夫即チ手執ラ、舎テ徑チニ趨テ、屋ニ
入り、更メテ潔服ヲ著ケテ出ヅ、士之ニ懇シテ行ク、既ニシ
テ墓前ニ至ル、農夫拜掃甚ダ恭シ、士心ニ之ヲ訝カル、因テ
問テ曰ク、爾、藤樹ニ於ケル何ノ親故アリテ、敬禮乃チ爾

ルヤ、農夫曰ク、藤樹先生ヲ欽仰スル、豈ニ惟余ノミナラ
 シヤ、閩邑皆然カリ、父老毎ニ其子節ニ語テ曰ク、吾里父子
 禮アリ、兄弟恩アリ、室ニ忿疾ノ聲無ク、而ニ加號ハ色アル
 者、職トシテ藤樹先生ノ遺教ニ由ルナリ、此ハ人トシテ
 其恩ヲ戴カサル無キ所以ナリト是ニ於テ士客ヲ變ジ
 テ曰ク、世稱シテ近江聖人ト爲ス、吾乃今ニシテ其庶幾
 ニ非ルヲ知ルナリト、即チ其墓ヲ敬拜シ、厚ク農夫ニ謝シ
 テ去ル、又藤樹ト同里ノ人、江戸ニ於テ其家ヲ嗣ク、一日客
 アリ、語次儒ニ及ブ、客問テ曰ク、中江藤樹ハ子ノ里人ナリ、
 聞ク其學世ノ仰グ所ナリト、子必ス其行誼ヲ詳クヒ
 シ、請フ吾カ爲ニ譯レト、其人客チラ改メテ曰ク、藤樹先生
 ハ吾ガ先子ノ師事スル所ナリ、因テ其平生ヲ悉クヒリ、實

ニ近江藤樹ハノ名ニ非カス、我レ出テ、其家ニ從タル
 長子其日讀スル所、先生ノ墨蹟一張ヲ得、我レ其ノ上
 ツ戒勅シテ曰ク、此ハ是ト聖人、予澤記善ク、予惟ニ知
 ラザルモイラシテ、酒リニ止マレ、勿レト、今吾子先生ヲ敬
 ハシ、則チ之ヲ觀ルヨリ得ヒシメ、予乃チ起テ、復來ノ更
 又着ク一軸ヲ懸ヨリ、起シ恭ゲテ、案頭ニ置キ、頂禮、跪拜ス
 ル、猶ホ無徒ハ怖儀ヲ蒙ルガゴトシ、客始メテ敬ヲ起シ、
 以爲ニ藤樹ハ賦歎ヲ多ク、匹夫ナリ、而シテ士大夫ノ間ニ重
 シト、此ノ如クナレバ、則チ其道德世ハ所謂儒者
 ト、適チニ同ジカラズ、豈ニ禮セザルコトヲ得ニヤト、盟嘏再
 辭シテ、後チ之ヲ觀タリシトイフ、
 櫻所子曰ク、藤樹ノ篤行力學ヲ以テ、近江聖人ノ名ヲ得、其

積善又且學蹟ニ至ルマデ、崇敬セララル、者其初メ大學ヲ
讀ミ天子ヨリ以テ成人ニ至ル、壹ニ是レ身ヲ修ムルヲ以
テ本ト爲スノ語ニ至リ、其人豈ニ學ムテ至ルムカラザル
者ナランヤト感悟シ、志ヲ勵マシテ修鍊セシメ、由レリ、思
フニ元和觀感以來、主運漸ク旺シニシテ、學問文章、以テ一
世ニ表斗タル者、其人多シ、而シテ篤行ヲ以テ稱セララル
者、獨リ翁ト仁齋伊藤氏アルヲ見、然ルニ翁ノ門、熊澤蕃山
ノ如キ俊傑ヲ出スヲ以テ視レバ、其決シテ難直ナハ一漢
學老爺ニ非ズシテ、必ズ經世濟民ノ學術アリシヲ知ルベ
シ、唯其躬行ヲ先トシ、貧賤ニ素シテ貧賤ヲ行ヒ、敢テ放言
高談、以テ人ノ耳目ヲ眩ススカ如キ、一ヲ爲サシムルノミ、所
孟子ノ所謂、入ミテ以テ堯舜タルミシトノ語ハ、決シテ言

フベクシテ行フベカラズトセンカ、恐クハ行フベカラザ
ルニ非ズ、行ハザルノミ、然レバ則チ婢タリ、跣タル唯其人
ノ初志如何ニ在リ、且夫レ藤樹ハ、家貧フシテ、論語ノ講ヲ
聽ク月餘ニシテ、後チニ四書大全一部ヲ以テ師トセシモ、
遂ニ其躬行心得彼レガ如キニ至ル、今ノ書生、内地ノ人ハ
從テ學ブニ足ラズトシ、往々碧眼ノ歐客ヲ師トシ、若クハ
英京佛都ニ多年留學シ、一ノ得ル所無キ者ノ如キ、若シ翁
ヲシテ之ヲ見セシメバ、或ハ當サニ驚死スベシ、

第四 長沼宗敬儒術ニ志シ、兵學ヲ窮メシ事

長沼宗敬、澹齋ト號ス、信濃松本ノ人、長沼五郎宗政ノ裔ナ
リ、澹齋四歳ニシテ父ヲ喪ヒ、丹波守戸田候ニ明石ニ從ヒ、
又候ニ從テ加納ニ移ル、年十五ニシテ住ヘテ、近習トナリ、

祿百石、十六歳ニシテ上疏シテ事ヲ言フ。後チ又讒言ヲ進
 ムルモノ數卒ニ合ハズシテ去リ、江カニ赴キ、又筑後ノ國
 主有馬侯ニ仕ヘ、二百五十石ヲ食ム。寛文八年、祿ヲ辭シテ
 復々仕ヘス。初ハ澹齋ハ加納ニ在ルヤ、僧寺ニ遊ビ、字ヲ習
 フ。愛兒ハ小學ヲ讀ムヲ聞キ、輒ナ能ク之ヲ記ス。僧爲ハニ
 其文ヲ摘ムテ講解ス。澹齋大ニ悦ビ、是ヨリ志ヲ儒典ニ傾
 ム。篤ハ洛陽ノ説ヲ信ジ、持敬ヲ以テ主ト爲シ、聖賢ヲ以テ
 必ズ及ブ可シト爲シ、經術ヲ精研シ、旁ヲ甲州ノ兵法ヲ學
 ブ。既ニシテ曰ク、世傳フル所武田氏ノ兵法ナル者、多クハ
 小幡景憲輩ガ割裂躡縫スル所ニシテ、當時ノ信傳ニ非ル
 ナリ。吾武門ノ譜トシテ以テ正サバル可カラズト是ニ於
 テ古今ハ精鈐ヲ鑛極シ、身戎陣ヲ經ル者アルヲ聞ク、必ズ

性テ之ヲ惜ム、鏡馬山、神樂城ノ制、至ルニテ、前カレトシ
 ナリ。諸ノノ一代師律ノ意、原ニ諸レヲ保嬰レトシ、多シ
 下モ明將俞成ノ法ニ習ヒ、時日ヲ置ルリ實効ヲ驗シ、細羅
 參伍シ、明辨精遠シテ、兵要錄ニ十二卷ヲ著ハシ、以テ家
 言ヲ建ツ。其大要ハ、劍取刀槍之ヲ本邦ニ原シ、節制紀律之
 ヲ漢土ニ取り、大小火器ノ法則ハ、西洋ヲ參用ス。嘗ノ門生
 ニ語テ曰ク、吾錄三分ハ書ナリ、二分ハ口訣ニ在リ、五分ハ
 則チ學者ノ自得ニ在ルヲ也。後來善ク之ヲ用ル者ゾル
 必ズ我法ヲ採守ス可カラザルナリト。其最ニ深ク悟ル所
 者ハ、風后ガ振奇、武侯ガ八陣ナリ、握奇ハ陣集漸ヲ述ハ
 以テ公孫弘、獨仙及輩ノ失ヲ糾シ、李靖、趙水、學等ノ未ダ補
 ハラザル所ヲ補フ。時、聲譽海内ニ高シ、諸侯爭ヒ請ハ

師ト爲ス。然レ其澹齋兵家ヲ以テ自ラ名トスルヲ欲セズ
又兵門ニ介馳スルヲ喜バズ。其請ニ應ズルニ三家ヲ以テ
限リト爲ス。先ヅ儒經ヲ説キ。然ル後チ武ニ及テ。備前少將
光政。其著書ヲ看リヲ請フ。乃チ出帥篇ヲ抽ク。呈覽ス。以將
深ク之ヲ嘉ミ。歎シテ曰ク。予ガ尚尚小壯ナラシムハ將
甘。斯人ニ從テ遊バントス。今若ク及ス力ヒト。乃チ其臣
日置伊右衛門ヲ以テ從學ス。明不人。城主。松平若狹守
直明。客禮ヲ以テ之ヲ延キ。班ヲ擧ゲ。列ニ政務ヲ與セリ
聞カシム。居ル五年。去テ山城伏見ニ隱レ。元祿三年。五十六
ニシテ歿ス。其門下學フ者。後先數百千人。其不モ著ハル、
者。佐枝ヲ重宮川尚古一人ノ學分。以テ兩於トシ。長沼流
兵學ノ解。久シク世ニ行ハレ。其者。即チ澹齋ノ祖述

不ル者ハハトイフ
櫻所子曰ク。澹齋ノ生ル、鎌倉ノ後ニ在ルヲ以テ。人欲ハ
其書ニ敗シ。几上ノ座談ト爲スト。雖モ江師ノ門下ニ義家
アリ。趙本學ノ弟子ニ俞大猷アリ。學ノ以テ已ム可カラザ
ルヤ。此ノ如シ。今ヤ歐洲ト交通セシヨリ。兵家ノ法制一變
スト。雖モ澹齋ノ學。傳テ徳川氏ノ季世ニ及ブマデ。大ニ世
ニ行ハル、者。亦其篤志力學。凡常ナラザルヲ見ルニ足
リ。

第五 熊澤了介學ニ志シ良師ヲ求メ大ニ其業ヲ成ス

熊澤了介名ハ伯繼。小字ハ治郎。後チ助右衛門ト改ム。藤

山ト號ス。父チ野尻藤兵衛一利ト曰フ。一利初メ加藤嘉明

二仕フ。後ナ官ヲ罷メテ京都ニ寓ス。熊澤氏ヲ娶リ。元和五
 年ヲ以テ。了介ヲ平安五條ニ生ム。外祖守久。養テ嗣ト爲ス。
 因テ熊澤氏ヲ冒カス。寛永十一年。了介歳甫イテ十六。京都
 ノ所司代板倉侯備前侯少將光政ニ囑シテ之ヲ舉ゲ。備侯
 職者遇テ加フ。偶鳥原ノ賊起ル。侯幕府ノ命ヲ奉ジ。江カヨ
 リ歸リ。兵ヲ治メ以テ應援ニ備フ。是時了介年十八。猶ホ年
 少ナルヲ以テ東邸ニ留ル。乃チ請ハズシテ岡山ニ歸ル。軍
 律ヲ干カスヲ以テ罪ヲ獲タリ。了介歳二十。自ら以爲ク公
 事。監ヤ下葬シ。寧處ニ過ス。何レ以テ文武ヲ講習スル
 事得シ。此ハ若クニ込テ身ヲ終ハル。固ヨリ吾志ニ非ル。ハ
 今ヤ執ト將サニ俸禄ヲ増賜スルノ命ヲラントス。然ル
 ガコトクンバ則チ如何ゾ命ヲ拒ムヲ得シヤト。遂ニ近江

ノ桐原ニ隱ル。歳餘給ノテ四書ヲ讀ミ。宋註ニ傳テ其義
 ヲ研窮ス。又京ニ赴テ良師ヲ求ム。以テ其志ヲ得ヌ。壯
 ニ病ヲ投スル者一人。誦テ曰ク。往昔余キハ爲メニ遠ク行
 ク。時金二百兩ヲ懐ニス。即チ坐ノ窟ヲヒシムル所ノリ。金
 ニシテ驛馬ニ跨ガリ。金ヲ出シテ靴ニ繫グ。日暮之ヲ收ム
 ルヲ忘レテ宿シ。烟燭シテ枕ニ就ク。半夜初メテ覺ム。其
 チ金ヲ遺ルヲ覺トル。則チ莽然トシテ。猶ホ疑フテ夢寐
 ト爲ス。既ニシテ神乃チ定リ。痛心疾首。千思萬慮スレドモ
 之ヲ求ムルニ術無ク。一ニ死ヲ維經ニ決ス。或然トレテ自
 ラ天ニ祈ル。祈モ所ナラスシテ。此悲涼ニ逢フヲ歎ズ。時
 ニ颯々ト聲甚ダ急ナルヲ聞ク。之ヲ問ヘバ。則チ稍ス。馮扶
 某ナリト。因テ巫カニ出ツ。渠レ即チ金ヲ出シテ曰ク。少時

家ニ歸テ將リニ馬ヲ浴ハントス。鞍ヲ解クニ及ンデ之ヲ
得タリ。是レ君ノ遺マ、所ナリ。故ニ來テ還呈ス。封完キ
。故ノ如シ。吾驚喜措ク所ヲ知ラズ。勝鑑別ニ十六兩ノ
。一銀ヲ以テ之ヲ謝ス。馬夫受テスレテ曰ク。君ノ物若
旨ス。莫ノ謝カ之レアランヤ。然レ此夜ヲ冒シテ來ル。此實
二百文ヲ得レバ足リリト。吾曰ク。尊ビ自ラ作ス。及テ養義
。心ナクンバ。吾生ヲ得ル。地無ク。所謂死ヲ生カレ。骨
ニ肉スルナリ。不使^{合カ}。黃物。取テ報トス。非ス。爵女以テ
寸心ヲ表ス。馬夫^{合カ}。歸ス。乃チ八兩ヲ減ズ。亦受テ。人措
減レテ。纔カニ二方金ニ至ル。馬夫執ル。一益。確シ。曰ク。君我
ヲ測ル。一ナカレ。守ル所。ハ。ハ。ナリト。吾輩。ハ。問。曰
ク。彼ニ淡^{合カ}。見。今。世多ク見ス。其義ヲ以テ利ト爲ク。汝チ

カ如キニ至テハ。則チ細テ得ベカラズ。所謂守ル所ノ者ト
ハ。同ツマシ。曰ク。戰^{合カ}。報^{合カ}。リ。フ。勤^{合カ}。ハ。當^{合カ}。利^{合カ}。ヲ。思^{合カ}。ハ。リ。ン。ヤ。而
シテ。中^{合カ}。六^{合カ}。德^{合カ}。右^{合カ}。衛^{合カ}。門^{合カ}。。曉^{合カ}。樹^{合カ}。一^{合カ}。云^{合カ}。名^{合カ}。アリ。里^{合カ}。中^{合カ}。。教^{合カ}。授^{合カ}。人^{合カ}。。嘗
テ。其^{合カ}。言^{合カ}。ヲ。聞^{合カ}。ク。一^{合カ}。曰^{合カ}。ク。誠^{合カ}。正^{合カ}。以^{合カ}。テ。具^{合カ}。身^{合カ}。ヲ。修^{合カ}。ス。若^{合カ}。ニ。事^{合カ}。フ。ル。一
忠^{合カ}。ヲ。致^{合カ}。ス。親^{合カ}。ニ。事^{合カ}。フ。ル。一。等^{合カ}。ヲ。盡^{合カ}。シ。貧^{合カ}。ヲ。以^{合カ}。テ。潤^{合カ}。ル。一。カ。レ。戰^{合カ}
ヲ。以^{合カ}。テ。狂^{合カ}。ル。一。カ。レ。ト。今^{合カ}。若^{合カ}。シ。賜^{合カ}。フ。所^{合カ}。ヲ。以^{合カ}。テ。之^{合カ}。ヲ。利^{合カ}。ト。セ。ハ
則チ此心ヲ欺クナリト。言畢テ去ル。噫。澆季ノ世。安シク此
人ヲルヲ得。ヤト。予介傾聽ス。ル。一。良^{合カ}。久^{合カ}。ヲ。シ^{合カ}。フ。曰^{合カ}。ク。馬^{合カ}。夫^{合カ}
ハ。一^{合カ}。節^{合カ}。。鄙^{合カ}。人^{合カ}。ハ。一。素^{合カ}。ト。道^{合カ}。ノ。何^{合カ}。物^{合カ}。タ^{合カ}。ル。ヲ。識^{合カ}。ラ。ズ。利^{合カ}。ニ。趨^{合カ}。ル
一。驚^{合カ}。ル。カ。若^{合カ}。ハ。何^{合カ}。ハ。我^{合カ}。カ。之^{合カ}。一。思^{合カ}。ハ。シ。マ。而^{合カ}。テ。其^{合カ}。廉^{合カ}。潔^{合カ}。主^{合カ}。ノ。若
子^{合カ}。ニ。德^{合カ}。州^{合カ}。ノ。者^{合カ}。必^{合カ}。ズ。教^{合カ}。育^{合カ}。ノ。愛^{合カ}。ス。所^{合カ}。ナリ。所^{合カ}。謂^{合カ}。中^{合カ}。江^{合カ}。與^{合カ}。右^{合カ}。衛^{合カ}。門^{合カ}
氏^{合カ}。ノ。一。者^{合カ}。其^{合カ}。德^{合カ}。ト。學^{合カ}。シ。想^{合カ}。ヒ。見^{合カ}。ル。可^{合カ}。キ。ナリ。今^{合カ}。ノ。世^{合カ}。ニ。方^{合カ}。テ。此

人ヲ捨テ誰ニカ適從ヒヨト。是ハ即チ火裝シ往テ請
テ、業ヲ門ニ受ケシ、トテ請テ藤樹藤ハル。人ハ師トナ
リ。是ハ師トナリ以テ了介益請テテ置カス。三夜其無下
疑タリ。藤樹ノ母之ヲ見。藤樹ニ謂テ曰ク、人遠方ヨリ來ル
悲請北ノ如シ。之ニ習テ所ヲ傳フルヒ誰カ好ムテ入テ師
ト爲トテ謂ハシヤト。是ニ於テ始メテ發容ス。時ニ寛永十
九年了介年二十四ノリ。明年一利江ハニ浦入任テ求メ了
介ハ則チ弟妹八人ト留リノ共ニ母ニ事テ家甚カ貧シ。每
ニ米ノ糶糶ヲ端ト爲シテ之ヲ食テ冬ニ方テハ織襪ハ
以テ寒ヲ禦ク。刻苦スルト法一ニ四年入成ト之。勤ムル
ニ仕官ヲ以テシ。謂テ曰ク了介家數ハナリ。必ク將シニ
飢ニ及バントス。了介皆ニヒク止保一年了介年二十七

學識愈高キ。備前侯事ヲ其村ハ凡常ヲテザルモ其
慕シテ止マシ。京極侯ノ煩ハシテ了介ヲ詔シ。以テ了介ヲ轉
ス。是ニ於テ了介復岡山ニ來ル了介ノ岡山ノ去ル。凡ソハ
年ニシテ還ル。居ルトニ歲候了介ヲ以テ大隊ニ充テ。三百
石ヲ給ス。同僚皆了介ニ劣カス。後チ擢テ、騎隊帥ト爲シ
藩政ヲ興カリ聞カシ。祿三千石ヲ增賜ス。是ニ於テ了介
乃チ侯ニ告ケ。一年食ハ所テ邑入ニ三倍シ。以テ之ヲ貸サ
レ。了介ヲ請テ。幕ノ其秩級ハ當州ニ攝スベキ所ノ兵器ヲ
具ヘシト欲ス。了介乃チ侯之ヲ許ス。後チ幾クモ無ク償還ス。
了介候ニ請テ曰ク。藩制四疆ハ要害處分。騎隊帥以テ之ヲ
保テ。大隊ノ士二十人之ニ屬セシメテ。備作撫ノ境界。大
牙相接ス。侯乃チ了介ヲ以テ之ニ當カ。了介曰ク。其間夕老

ニ處テ亂ヲ忘レズ古々以テ威ヲ振ニ在リ武備焉ヨリ
事ヤハナシ然レバ則チ法分違リニ從テ難ク其請ク先
之ヲ勤シ以テ緩急ニ備ヘラト候之ヲ可トス是ニ於テ備
士者ナリテ簡ビ匹馬甲楯以テ諸レヲ使宜ノ地ニ處ク是歲
了介年三十一慶安三年候ノ述職ニ感シテ江戸ニ遷ル職
隊帥ヲ以テ幸臣ノ事ヲ攝行ス名譽備甚ニシテ信服スル
者多シ肥前候幕府ハ宗室ヲ以テ了介ヲ攝補ス凡テ送迎必
ス門ニ及ズ松平伊豆守久世大和守長倉内膳正頼田宛前
守淺野因幡守中川山城守水野周防守水多下野守松平日
向守等ハ諸侯其他名門右族等ノ之ノ延ク將軍家光公了
介ノ學識アルヲ聞キ將サニ召見セシム事ハ棄去セラ
レシヲ以テ果ケズ後ヲ候ハ江戸ニ述職スルヤ或ハ危シ

或ハ留マシ義應三年備前洪中ノリ明暦元年大ニ饑ユ封
内ノ民死スル者九萬人ト云フ候大ニ之ヲ憂ヒ乃チ諸老
臣ニ屬シテ謀議セシム衆論決セズ了介曰ク緩議日ヲ移
リバ恐クハ餓草塗ニ載ラルヲ致サント是ニ於テ大ニ府
庫ヲ開キ以テ困窮ヲ賑ハス然レ氏奉行者或ハ邊緩旨ニ
違フヲ以テ了介乃チ自ラ巡檢シ德施疆内ニ普ホシ民困
テ蘇息ハ是ヨリ先々岡山山城東西ノ村落毎ニ盛暑ニ方リ
水ノ涸レハ困ム了介曰ク是諸山密樹繁陰ノ大氣ヲ蓄
ヒ雲雨ヲ醸ス無キヲ以テノ故ナリト是ニ於テ田賦ヲ照
料シ壯丁ヲ調發シ松數千株ヲ泰山ニ植テ培養法ヲ得歲
テ逐テ繁茂ス是ヨリ九夏雨多クシテ近村未ダ嘗テ旱魃
患アラズ又令ヲ下ダシテ川ノ兩邊ノ山木ヲ伐ルヲ禁

曰。曰。山。不。毛。則。雨。水。保。如。直。子。土。積。ヲ。流。力。
 ン。吐。隨。者。淺。シ。ト。凡。ソ。封。内。池。ヲ。穿。大。隈。ヲ。築。キ。溝。渠。ヲ。開。キ。
 曹。運。ハ。便。ニ。ス。ル。等。ハ。事。概。本。馬。上。之。ヲ。望。ミ。利。害。ヲ。較。量。ス。
 數。十。年。ハ。後。ヲ。其。言。皆。中。々。ラ。ザ。ル。ナ。シ。ト。云。ク。子。介。ハ。明。
 了。介。ハ。西。歸。ス。ル。ニ。及。ビ。往。テ。板。倉。侯。ニ。謁。ス。侯。曰。ク。子。ハ。明。
 主。ニ。仕。ヘ。言。聽。カ。レ。計。從。ハ。ル。吾。徐。口。ニ。之。ヲ。籌。カ。ル。ニ。子。其。
 終。リ。ヲ。善。セ。ン。ト。欲。セ。ハ。則。チ。早。ク。致。仕。シ。テ。田。里。ニ。屏。處。セ。
 ヲ。今。ヨ。リ。後。ヲ。復。々。世。事。ヲ。言。ク。勿。レ。此。レ。功。成。リ。身。退。ク。テ。
 義。ヲ。リ。ト。了。介。拜。謝。シ。テ。去。ル。然。レ。臣。眷。遇。ス。涯。ヤ。俄。カ。ニ。體。
 骨。ヲ。乞。フ。ヲ。得。ス。加。ハ。ル。ニ。濟。世。ハ。志。自。白。己。能。ハ。ザ。ル。ヲ。
 以。テ。ス。且。ツ。命。ヲ。奉。シ。テ。復。々。江。戶。ニ。赴。ク。是。時。此。事。ヲ。共。
 ニ。ス。ル。者。ハ。隙。ニ。リ。了。介。亦。自。ラ。安。ン。ト。シ。ト。明。哲。ノ。可。以。水。谷。

了。介。ハ。了。介。斷。シ。テ。崖。ヨ。リ。墜。チ。手。足。ヲ。傷。ク。是。ニ。由。リ。歸。社。
 ヲ。乞。ク。和。氣。郡。寺。口。ハ。其。食。邑。ヲ。ル。ヲ。以。テ。此。ニ。ト。居。シ。藩。山。
 卜。跡。ス。琴。シ。新。古。今。集。ニ。載。ス。ル。源。重。之。久。歌。云。筑。波。山。は。や。
 虫。ま。げ。や。虫。ま。ぎ。け。れ。ど。な。も。い。ひ。も。な。い。を。ま。ら。ね。り。會。さ。
 ト。王。陽。明。ガ。立。志。ハ。說。此。歌。ノ。意。ニ。符。ス。而。シ。テ。志。げ。や。ま。ス。
 藩。山。ナ。リ。故。ニ。以。テ。歸。卜。爲。ス。ト。云。ク。一。由。リ。也。
 了。介。斷。ニ。居。運。ノ。志。アリ。侯。微。カ。ニ。其。情。ヲ。知。ル。自。雖。氏。然。カ。
 七。強。ク。止。ム。ハ。カ。ラ。ズ。又。意。之。ヲ。留。メ。ン。ト。欲。ス。是。ニ。於。テ。公。
 子。政。興。ヲ。シ。テ。其。祿。ヲ。贖。ハ。シ。メ。後。シ。爲。ス。者。ヲ。如。シ。是。歲。萬。
 治。元。年。了。介。年。四。十。遂。ニ。疾。ヒ。ヲ。以。テ。假。骨。ヲ。乞。ヒ。去。テ。京。師。
 一。寓。ハ。而。シ。テ。一條。右。府。中。院。大。納。言。清。水。谷。大。納。言。油。小。路。
 大。納。言。中。御。門。中。納。言。野。宮。黃。門。押。小。路。參。議。伏。原。參。議。等。

其世貴紳其學ヲ慕上東嶺ヲ行テ來學シ佩玉鐙ヲ車馬門
ニ滿ツ聲華一世ヲ蓋ス居ル丁之三頃クス或人丁介ヲ所
司代牧野侯ニ請ス牧野侯之ヲ信シ丁介ヲ居ム寛文七年
春遂ニ行テ大和ノ芳野ニ隱死然而又去テ鹿背山城
ノ鹿背山ニ結グ客アリ問フテ曰ク先生頃者聞テ其ヤ否
ヤト曰ク吾善ヲ為ス惟レ日足ラズ何ノ閑暇カ之ヲ為ス
ト客曰ク今日善ヲ為スモ其難何ニ由テカ見ハレンヤ
ト了介毅然トシテ曰ク人苟モ志ヲ義ニ立ツル則チ聖
賢掃蕩モ皆善ニ進ムノ地アリ若シ然ラズンバ一タビ九
合ヲ匡スモ亦復兒戲土塗ノミト客曰ク善哉上他日及問
テ先生何ノ樂ハ所ゾト了介曰ク獨リ樂地ハ各教ニ在ル
トトナラズ蘿月松風モ亦自テ天心ヲ見ルト寛文九年酒

井雅察頭、教倉内膳正ニ候旨ヲ傳ヘ了介ヲシテ攝州明石
ニ徙ラシム。時ニ松平日向守明石ニ守タリ。因テ太山寺
傍ニ居ラシム。弟子益進ム。門人嘗テ問フテ曰ク。夫子未ダ
嘗テ憂ヘサルカ。何為レゾ窮ニ處スル申如ナルヤ。夫子
未ダ嘗テ懼レサルカ。何為レゾ厄ニ遭フテ裕々如ナルヤ。
了介曰ク。是レアルカ。大警使仁者ニシテ必ス達セハ。困
損仕テ汶上ニ辭セズ。勇者ニシテ必ス達ゲバ。仲由纒ヲ蔓
下ニ結バズ。了介時ニ來スレバ。千乗ノ賦ヲ理ム。時否サレ
バ。身ヲ一畝ノ宮ニ東カヌ。否泰ハ運ナリ。禍福ハ天ナリ。夫
レ又何ヲカ憂ヘ。何ヲカ懼レン。吾ハ則チ以テ之ヲ天ノ福
トシテ。罪ヲ古人罪無クシテ。月ヲ藹居ニ弄スルヲ願フ者。吾
道月ニ乘ジテ。中庭ニ彷徨ス。幽情遠概亦人界ニ似ズ。昔

日本志編

十七

ヲ播テ世ニ薰灼スルハ心誠ニ罪アルヲ知ル豈一天ニ愧
子サテヤ吾内ニ省ミテ疚シカラス人言何ソ極フルニ
足ラヤ今張テ嫌諱ニ觸ルト雖世人多ク罪名コ
タルニ非ルナリ百年ノ後チ必ス公論アラシク唯是間居
無事絃歌講誦痛カニ先王ノ道ヲ樂ムテ老將ヲ
トスルヲ知ラサルノミト延寶七年明も侯判曰大和
郡山云移ス介亦此ニ遷ル幾クモ無ク復對曰若河ニ
ス本多下野守之ニ代ル介ヲ待ツニ松平日向守ノ期
ニ准テ弟子遠方ヨリ至テ業ヲ受ケル者多シ其名海内ニ
續セタリ貞享四年將軍綱吉公ノ命ヲ以テ了介又古河ニ
徙ル松平日向守之ヲ待以愈厚シ其歲ノ十月封車曰幕府
并北習野政務ヲ更始スルヲ勸ム大ニ旨ニ忤ヒ古河ニ禁

錮セテ了介既ニ時ニ用ナラハ得ズ嗚然トシテ歎
シテ曰ク吾道行ハレズ何ヲ以テ名自ラ後世ニ見
セト乃チ大ニ志ヲ著述ニ専ラニス其學經濟ニ長ズ論
ル所皆獨得ノ見ナリ
了介資性温良寛弘ニシテ家人ハ憐ト雖世相親ム猶少
肉ノゴトシ菜羹鮭炙ト雖世來テ饕食ナル者各能ク
去ル家法最モ儉素ニシテ妻子廢務ハ軒旋ハ關隔備
間ニ外ニ致ハレズ衣服飲食自然トシテ營々ハシ晩年
最モ音樂ヲ好シ音律ヲ精熨琴雅樂解テ著シ之ヲ弟子
授ク世知ル者或ハ和十利冠祿四年秋了介年七十三ニ
シテ歿ス其墓ニ展ムル者今ニ至テ絶ヘズ云々
了介年少ノ時體軟充肥セリ自云以爲ク武人ノ職一旦

爲甲ヲ被ムリ兵ヲ持シ馳驅奔走シテ爲サバハ前無シ而
 シテ豊肥斯ル如ク甚ク之ヲ歎ムズ稟受ニ由ルト雖モ亦
 或ハ安佚ノ致ス所ナリト是ヨリ苦ヲ攻メ淡ヲ令じ日後
 武事是レ講ス或ハ曠野ニ出テ鳥銃ヲ發シ或ハ山村ニ
 行テ民家ニ投テ其當直ニ當ルヤ木兵ヲ濶置ニ極クシ隙
 及暇ニ就クノ後夕獨リ竊カニ空庭ニ出テ捨劍ノ法ヲ演
 ス或ハ深夜屋ニ登リ火ヲ禦クヲ習ス是ノ如クスル者十
 餘年身軀稍瘦削セリト
 櫻所子曰ク淫實以來儒術ヲ以テ身ヲ立テ家ヲ興ス者多
 ホリラストセズ而シテ士太夫ノ品行ヲ維持シ三百年ノ
 久キニ及ベル者儒教ノ功多キニ居ルト云フモ亦不可ナ
 キナリ而レテ其間儒七ニシテ自テ地方ノ政治ノ與力

リ聞キ鶴澤ヲ其民ニ及ボセル者ハ獨リ熊澤藩山ノルノ
 藩山ノ始メ學ヲ志スヤ朱註ニ依テ四書ヲ所讀シ其師
 ヲ求メテ得ズ偶京師ノ逆旅ニ於テ中江藤樹ノ學識德行
 凡常ナラザルヲ聞キ奮テ之ヲ許ニ至ルヤ廬下ニ因ス
 ニ夜其篤志想フ可キナリ而シテ業成テ後チ富榮ニ處テ
 驕ラズ窮阨ニ居テ戚マズ其胸襟ノ洒々落々タルヲ視ル
 ニ足レリ今世ノ人士動モスレバ地位ニ隨テ其志嚮ヲ易
 エ朝夕ニ君權ヲ主張シ夕べニ民權ヲ唱和スル如キ者ト
 固ヨリ日ヲ同クシテ談ズハキニ非ズ且夫古今ノ學者論
 士間風俗ノ支弱ニ流在ルヲ慮カリ且ツ身體ヲ勞動ス
 ルハ推生ノ要訣ナルヲ以テ或ハ擊劍ヲ學ブベシトイヒ
 體操ヲ忽セニスベカラズトシ經濟家ハ歐洲學士ノ言ニ

由テ池ヲ穿テ隄ヲ築キ、溝渠ヲ疏鑿シ、遺運ヲ便ニスルノ
利ニ説キ、或ハ森林ノ國ニ必用ナリト論テ、而シテ明政府
ハ措置セテ、所モ亦森林ヲ蕃殖シ、漕運ヲ快利ニスル
等ノ事ニ、深ク注目セラレ、者ノ如シ。蕃山ニ百年ノ昔日
ニ在テ、既ニ皆チ之ヲ試ム、豈卓識ト謂ハサル可クシヤ。獨
リ此ノミナリキ、蕃山ハ一介ノ士ニシテ、既ニ楠侯ヲ殊遇
ニ受ケ、鄧帥侯伯束脩ヲ行ヒ、道ヲ問フアリ、或ハ賓師ノ禮
ヲ以テ之ヲ遇スルニナリ、名門右族爭テ之ヲ延クニ至ル。紀
州侯頼宣、蕃山ヲ禮待スル、送迎必ス門ニ及ブト云フ。其
他貴顯ヲ敬重スル所トナリシハ、推シテ知ルベキナリ、現
今泰西ノ學ヲ唱ヒ、世人ガ泰斗視スルノ學士アリト雖モ、
未ダ其德望此ノ如クナリ人アルヲ聞カズ、思フニ蕃山文

化表ガ編を刊スリルノ昔時ニ在テ、能ク斯クハ如キヲ致
セル者、命世傑ト稱スル由ルト雖モ、抑モ亦其志ヲ持スル
堅忍ニシテ、勉強刻苦、實學ヲ磨礪シ、智識德望並ビ高キヲ
以テニ非スヤ。夫レ蕃山嘗テ道ヲ求ムルニ熱心ナル、無下
ニ因スヲモ厭ハサルノ心ヲ以テ心トシテ、終始變セズ、故
ニ其志ヲ得レハ、一藩ノ制度ヲ釐革シ、天下ノ人士ヲシテ、
目ヲ屬セシムルノ功業ヲ建テ、其志ヲ失ヘバ、子弟ヲ教授
シテ、心ヲ風月ニ鍛マシメ、幽囚セラル、ニ至テ、生キテ其
道ヲ行フニ由シ無キヲ知り、專ラ著述ヲ事トシ、後世ヲ辨
蓋セントス。嗚呼蕃山ノ如キハ、有爲ノ士ト謂フベキナリ、
故ニ其出身ノ始メヨリ、歿後墓ニ辰拜スル者、今ニ至テ絶
世ニ至ルマデ、一モ頌ヲ醒マシ、齋ヲ起ス事ニ非ルハ無

少、皆チ以テ傳フベシト爲ス。故ニ煩ヲ憚ラズシテ前ニ具
 載マ、撰ク。昔山ノ風ヲ聞テ、志ヲ立テ節ヲ勵マヌ人ナラ
 シ。下ヲ、（抄）如昔山ノ風ヲ聞テ、志ヲ立テ節ヲ勵マヌ人ナラ
 第六、同時秀民志ヲ隣家ノ致聲ニ激勵セシ事
 同時秀民ハ備前ノ藩士ニシテ、慶安時代ノ人ナリ。暨ヲ以
 テ同侯ニ仕フ。其隣家ニ住スル青地三之丞トイヘル士ハ
 頗ル射術ニ勵精シ、公務ノ餘暇ニハ、夙夜射籠ヲ射テ習鍊
 スルヲ常トシ、晴雨ヲ問ハズ、寒暑ヲ論ビズ。遂ニ其技大ニ
 進ミ、善外狂猪ノ眼ヲ射ル。或時藩侯ノ前ニ放テ五矢ヲ以
 テ梅花ヲ的トシテ試シニ一矢ノ其夢ニ命中セザル無キ
 ニ至ル。此ニ放テ候深ク其技能ヲ感賞シ、猶ホ一矢ヲ以テ
 中央ハ寸ハ的ヲ射ヒシ人、三之丞命ニ應ジ、矢ヲ注シテ發

スレバ、後矢ハ前矢ノ射ヲ繼ミ及ベリト。秀民日夜勤
 フ。隔テハ隣家ノ弦聲ヲ聞キ、以爲ク、三之丞ハ寒暑氣雨ノ
 論セズ、日夜刻苦スル。此人如シ、則クニ我ガ業ノ如ク、其
 ハ、蚊、蟻ノ禍ニ在テ學テ可ク、冬ハ足ヲ火、開ニ投シテ諸
 ハ、心ニ試シ、武人ガ弓馬ヲ習鍊スルニ比スレバ、其難易莫ク
 殊ナリ。然ルニ彼ハ其困難ナル弓術ヲ習修シ、夜ナクハ
 日ニ繼ク。我レハ容易ニ爲シ得ベキ、學業ヲヌラ、惰リテ地
 陸ヲ徒消スルハ、豈ニ深ク省察セザルベクヤ。上ノ藩後志
 ナシテ、朝々ニハ仲景ノ書ヲ讀キ、夕ニハ扇華ノ美義ヲ
 探シ、弦聲ハ讀書ノ聲ニ和ス。終ニ共ニ一層ハ精リ、勤
 相競テ倦ムトヲ知ラザルニ至リ。秀民亦國手ノ名ヲ稱
 加セリ。故ニ當時備前ニ放テ、技藝ニ鍊達セハ者ハ稱スル

必ズ先ヅ指ヲ青油ノ弓術、岡崎ノ醫學ニ感セリト、
揚所子曰ク、人旅スル所ナクハ、愛奮勵精スル人好機ヲ
待サレモノナリ、秀氏亦三之丞ト隣ヲ爲スニ非ンバ、恐ク
ハ皆感ヲ以テ其身ヲ終ヘン、隣ヲ擇ブ豈當、一子ヲ教ユル
ノミナランヤ、然リト雖モ爲スアルノ士ハ、尋常庸人ノ職
ニ意ヲ凝ザル所ニ於テモ、猶ホ其志ヲ激勵スル者ナリ、即
チ越前黃門カ、阿國ノ舞ヲ觀テ泣ク人幾ナリ、秀氏カ詩家
ノ強聲ニ激セラレテ、其業ニ進ミシガ如キ、亦理ナル哉
第七、谷松三介勤志ヲ求メシ事
谷松三介、齊ト就ス、土佐ノ人、其父時中、大性豪爽ニシテ、
志氣アリ、最モ儒學ヲ喜ブ、時喪亂ノ餘リ、文化未ダ開ケズ、
故ニ儒學最モ典籍ニ乏シ、書ヲ四方ニ求メ、多ク之ヲ備ヘ

家産之ガ爲メニ殆ンド蕩盡ス、昔テ三介ヲシテ、小倉三首
ノ所ニ學バシム、謂テ曰ク、吾聞ク富貴ハ心ヲ失フト、由産
五百石也、子孫ヲ惠ム所以ニ非ルハリト、乃チ之ヲ嘗キ、
僅カニ數頃ノ以テ口ヲ飼スベキヲ存スト云フ、三介土佐
ヲ去リ京師ニ移リ、而シテカ戸ニ遊ヒ、掃葉候ニ事フ、暮年
之ヲ辭ス、性淡泊ニシテ財貨ヲ屑トセズ、且ツ其悟性中人
ニ逾エズト雖モ、然カモ勤苦志ヲ求ム、是ヲ以テ其學體目
アリト稱ス、
櫻所子曰ク、徂徠ハ當時名ヲ一世ニ擅ニシ、文壇ニ於テ許
ス所鮮シ、而シテ其護國隨筆ニ、谷一齋先生ナル者アリユ
云ト謂フヲ以テスレハ、以テ一齋ノ評ヲ定ムルニ足レリ、
而シテ其人、悟性中人ニ逾エズ、勤苦志ヲ求メ、以テ之ヲ持

タリトセバ、世々學業ヲ成サントスル人。其才無キヲ憂フ
ルコト勿レ。其學費ニ乏シキヲ歎ズルコト勿レ。唯、辛苦ヲ登岸
スルヲ厭ハザルノ志、未ダ立タザルヲ憂ヘヨ。

第八 新井君美貧ニシテ志氣ヲ持依ヒサリシ事

新井君美、白石ト號ス。江戸ニ生ル。其父ハ常陸ノ人ナリ。年
少ニシテ、江カニ到リ。久留利侯ニ仕ノ。白石初メ父ニ從テ
久留利ニ官ス。年二十一ニシテ、父ト共ニ仕ヲ辭ス。是ニ於
テ貧甚シ。人或ハ之ニ勸ムルニ、鹽ヲ業トシ、若クハ字ヲ教
ヘ、以テ給コ取ルノ計ヲ以テス。白石從ハス。一ニ意ヲ儒經
ト、史冊ト刻ス。時ニ河村瑞軒、殷富ニシテ多ク書ヲ藏ス。乃
チ就テ借覽ス。瑞軒心白石ノ月ヲラサルヲ知リ、因テ其女
ニ、御シ納ム。以テ婿ト爲サントス。白石肯ニビク後ノ

田侯ニ遊事ス。居ルコト十年、志ヲ得ズニテ去ル。時ニ貧亦甚
シ。篋中唯青錢三百文、米三斗ノミ。曰ク此ニ未ダ盡クテ東
畿ヒスト、炭氣少クモ、儒マズ。白石少クシテ、大志アリ。常
自ニ誦シテ曰ク、大丈夫生テ封侯ヲ得ズ、ハバ死シテ當ハ
ニ關羅玉ト爲ル。ハハシト。遂ニ幕府ニ仕、正徳辛卯、韓使來
聘ヒシ時、使者ト禮法ヲ論シ、竟ニ使者ヲシテ屈伏セシメ
シ。等殊功多シ。從五位下ニ叙シ、筑後守ニ任ス。年六十九ニ
シテ卒ス。古今著書ノ富、白石ニ若クハナシ。未ダ稿ヲ脱ス
ザル者ヲ併セテ、凡ソ百六十餘種ニ及ベリト云
櫻所子曰ク、我邦兵戈紛擾ノ日ヲ除クノ外ハ、關關ヲ以テ
官職ヲ世襲スルノ習俗タリシヲ以テ、技能アリト雖モ、
進ヲ得ル太ダ難シ。白石右文ノ世ニ生レ、寒門ニ委

持候ニ得シトスル望ミヲ懷キ家ニ陰石無キモ其志氣
 平直ニシテ遠ニ從五位下執後守ニ就任セラル、至ル
 今ノ朝聞世襲ヲ餐シ人材ヲ登庸セラル、隆時一遣
 若シ今日ニシテ小成ニ安ンジ遠大ノ志ヲ立ルナリ
 ズハ將タ如何ナル時ヲ待テ志ヲ立テ發奮勉勵ト
 第九 三宅正名同九十郎貧ニシテ苦學セシ事

三宅正名石卷ト號ス其第九十郎觀瀾ト號ス京都人
 リ兄弟共ニ少シテ學ニ耽リ家道ヲ汎ハセテ以テ資産
 道ニ涉ス乃チ家計ヲ所費シ以テ舊債ヲ償ハ則チ餘
 所餘トシ數金ハ正名第九十郎ニ謂テ曰ク今貧掛ルト
 雖モ短得餘食以テ數年ヲ支ムト云フト正名志愈厚ク環
 堵ヲ對シテ講習シ共ニ腹食ヲ忘ルニ至ル幾ク

毛無クシテ窮亦極ナル是ニ於テ兄弟相携テ江ノ邊ニ遊ヒ
 教授シテ給テ取ル居ルヲ數年正名京師ニ歸リ太極ニ坐
 ル時名翹然トシテ起リ弟子雲集ス中井範高等相謀テ官
 ニ請フテ庠校ヲ建テ懷德堂ト名ク正名ヲ推シテ祭主ノ
 事ヲ領セシム九十郎ハ黃門光國ノ名ニ應ジテ國史編修
 總裁ト爲リ後チ新井君美ヲ薦メニ因テ幕府ニ仕テ兄弟
 共ニ儒名朝野ニ噴々タリシト云フ
 櫻旂子曰ク人ノ事業ニ爲ス必ズヤ其初メニ於テ若干ノ
 資本ヲ投ヒザル可ラス而シテ世上遊蕩ニシテ家産ヲ蕩
 盡シ家計ヲ費ス其甚キハ妻ヲ典シ兒ヲ弃サル者モル者
 ヲ視ル其學習ニ資本ノ爲メニ資産ヲ傾ケ家計ヲ賣ル
 至ルモ敢テ其志ヲ撓メザル者絶テ無クシテ僅カニ有ル

所ナリ宜ナル哉其業ヲ成スニ及ビ名聲ヲ朝野ニ施クニ
 至リシヲ世ニ花費ニ爲ニ八十金ヲモテ書ヲ買ヒ師
 三謝スルニハ一命ヲモテ本以輩ハ猶小資本金ヲ募ラズシ
 テ一大會社ヲ起サントスルガ如シ生涯碌々トシテ人傑
 立セルヲ欲スト雖氏豈得々々ヤ
 第十 物徠速志ヲ抱ケ一代ハ儒宗トシ申
 徠徠又護園ト號ス姓ハ荻生氏小字ハ惣右ニ門江戸ノ人
 其父ガ巷墾ヲ以テ幕府ニ仕フ也曾中事ニ生シテ上總ニ
 流寓セラル徠徠ニ從テ共ニ住シ居ル丁十三年其親ハ
 所ハ田心野老其處ル所ハ釜ノ離煙既一書籍ニ乏シク又
 師友無シ徠小僅カニ大學讀解一本ヲルハ徠徠此ニ因
 テ研究シ其學敏ヲ群トシ幼ヨリ即チ遠思アリ是ヲ以テ

赦ハ直ヌテ江戸ニ遷ル業給ルニ大成ス初メ芝街ニ
 卜居ス時ニ貧居流ス力如シ吉野始ニ衣食ニ爲セシ時
 其寺ノ前ニ藤邪ヲ賣ハ家アリ徠徠ガ貧ニシテ食ハル
 憐ハシ目ニ露花葉ヲ鎖ル後徠徠ノ食ハシ至リ月ニ米三
 斗ヲ贈リ以テ之ヲ報ス徠徠抑澤氏ノ恨ニ對スルニ
 及ビ召サレテ書記ト爲シ然レハ群尚古微才以壽ヲ抑澤
 侯賜リ封ヲ益ス徠徠亦侯ノ寵遇ヲ以テ累リニ其談ヲ
 蓋以五百石ニ至ル徠徠其儒學ハ推然トシテ家ノ見テ
 立テ先儒ノ作ス所ハ一切之ヲ排ス其豪邁卓識雄文宏詞
 一世ヲ籠絡ス終ニ海内仰テ此邦未曾有ハ人ト爲シ一
 世ヲ以テ少時共學ヲ精修シ其仕途ニ就ク亦庶學ヲ以テ
 儒ヲ以テハ不或時大同越前守應相曰久聞ク徠徠博識合

聞知ニザル所無キ也。余將リニ試ル一問所以テ躡クシメ
ントス。其方其都ヤテ問ニ曰ク。世ニ強給ハ説アリ。何ノ謂
カ。徂徠答テ曰ク。事某年某人ハ著スル所ノ一小説。一由
ル大史カ分其書載スル所。鼠類ハ春屬名。進。口ヲ衝テ襲マ
注ク。カ如シ。忠相始メテ其驅記ニ服ス。其驅記亦新類ナリ。
徂徠書ヲ看テ暮ニ向。ハ。則チ出テ。掃障ニ就キ。掃障ハ
字ヲ辨ス。可カラサルニ至レバ。則チ入テ。齋中ノ燈火ヲ判
ズ。或ニ且ヨリ深夜ニ及テ。手卷ヲ釋ク。時無シ。其平
素分テ光陰ヲ惜ム事ヲ以類ナリ。眼向報。某夜ノ元日。祖
袂ヲ訪テ。徂徠方ニルニ。隱ツテ。孫子ヲ聞ス。面垢洗ハズ。髮
亂ヒテ。梳ラズ。新年ヲ知ラザル者ノ若シ。乃チ盥々トシテ。
其ヲ談ジテ置カス。南郭竟ニ新掃ヲ祝スルヲ得ズ。シテ去

一リ一ニ

櫻所子曰ク。徳川氏ノ廟府ヲ江戸ニ開キシヨリ。昇平三百
年。其間鴻山碩儒多シト雖。其道德ニ於テハ。則チ蘇樹仁
齋。其博學洽聞ニ於テハ。則チ徂徠物氏ヲ推ス。後チノ學者。
激昂奮勵マレ。氏。竟ニ及ブ。試ハズ。徂徠ノ學。其瑜瑕得失。
則チ猶ホ免ヌカレズト雖。亦不世出ノ豪傑ト謂ハザル
可ケンヤ。然ルニ藤樹仁齋。徂徠ノ三大家。其二師友無クシ
テ。書籍ニ乏シク。加フルニ其家貧窮ナルヲ以テスルモ。此
然不挽ノ志ヲ懷キ。分テ光陰ヲ惜ミ。耐忍勉強ヲモツテ。
遂ニ旗幟ヲ文擅ニ樹テ。一世ノ泰斗タルノミナラス。後世
ノ學者ヲ風靡スルニ至ル。中ニ就テ徂來ノ如キハ。其書ニ
乏シ。大學諺解一本ニ止ル。其家ノ貧キ。雪花菜ヲ食テ氣ノ

支フルニ及レシニ非ズヤ。今ノ青年輩動モスレバ學費ニ
乏キヲ訴ヘ。書籍ヲ闕クヲ歎ジ。良師無キヲ慨スル者。至竟
已レガ怠惰ニシテ。安佚ヲ貪ホル。非テ捷フノ口實ノ
若シ然ラズト謂ハ。前ノ三大家ガ學業ヲ大成ビシ博記
ヲ視ヨ。

第十一 兩森芳洲年八十一始メテ和歌ヲ學ヒシ事

兩森芳洲字ハ伯陽。小字ハ東五郎。京都ノ人ナリ。年十七ハ
江戸ニ遊ビ。木下順庵一從學シ。業大ニ進ム。順庵稱シテ後
進ノ領袖ト爲ス。遂ニ其薦メニ因テ。對馬候ニ並仕シ。丈敷
ヲ掌トリ。韓人ニ接待シ。名聲海ノ内外ニ馳ス。芳洲ノ韓語
ニ通ズルヲ以テ。韓人ト相說話スル。譯者ヲ假テス。韓人戲
ラ曰ク。君善ク諸邦ノ音ヲ操ス。而シテ殊ニ日本ニ熟ス

ト。芳洲年八十一ニシテ。始メテ和歌ヲ學ブ。其意ニ認ラフ
詩ハ則チ時アリ之ヲ作ル。稱ス可キ者無シト雖。氏平仄ヲ
謬ラザルヲ得。國風ニ至テハ。一ニ其法ヲ解セズ。先ヅ古歌
ニ熟讀スルニ如クハナシ。今ヨリ古今集ヲ讀ム者一千。遍
而ノ後チ自ラ賦スル者一萬首。其レ或ハ少ク通スル所。ア
ラント。乃チ二年ニシテ千遍畢ル。又三年ニシテ萬首就ル。

深川銳庵曰ク。伯陽子ニ語テ曰ク。玉露凋傷。楓樹林。美ハ則
チ美ナリ。我ガ猿太夫ノ紅葉鹿嶋。人ヲシテ感ジ易カラシ

ムルノ愈ルト爲スニ如カザルナリト。伯陽華音ニ善シ。家
博ニシテ蒸村アリ。其品茂郷ノ下ニ出テズシテ。其言此
如シ。知言ト謂フ可キ者ナル哉ト。

櫻所子曰ク。我邦ノ三十一言周代ノ三百篇。其他佛經ノ傳

頌、舊約全書ノ詩篇、及ビ回教火教ノ神ヲ禮拜スル唱歌等、
世界各邦、皆古來此種ノ者アリ、而シテ其人ヲ感動スルハ
必ス其國人ノ耳目ニ慣熟セル者ヲ以テ最モ深シトス、且
昔時戰亂ノ日ト雖モ、將士ノ心ヲ國風ニ傾クル者多シ、
中ニ就テ義家ノ^{切來關}ノ咏、及ビ貞任ノ年を經、^一絲の素
糸の悲、^一モ、^一以トノ句ヲ以テ、義家ノ衣の、^一乃て、^一ハ、^一後、^一ころ、^一以
^一に、^一け、^一り、^一ト云セカケシニ應ジタルガ如キ、宗任ノ梅花ヲ問
^一ハレ、^一ニ直チニ國風ヲ以テ答ヘシガ如キノ類、^一救舉ニ違フ
テラズ、太田持資ガ、^一遠く、^一あり、^一近く、^一ある、^一みの、^一濱、^一千鳥、^一鳴、^一音、^一に
湖の、^一満、^一千、^一と、^一ぞ、^一ふる、^一ト云テ、^一湖、^一汐ヲ知リ、^一底、^一ひ、^一を、^一さ、^一淵
茶、^一ハ、^一睡、^一く、^一山、^一川、^一の、^一淺、^一を、^一瀬、^一ふ、^一と、^一そ、^一あ、^一だ、^一波、^一ハ、^一な、^一て、^一ト云フニ由
テ、^一利、^一根、^一川ヲ、^一渡、^一り、^一板、^一倉、^一周、^一防、^一守、^一ノ、^一鷲、^一の、^一尾、^一の、^一山、^一此、^一奥、^一ふ、^一も、^一人、^一そ、^一

すむ、^一佛、^一法、^一僧、^一の、^一鳴、^一に、^一つ、^一を、^一て、^一ト云フニ由テ、^一山、^一賊ヲ捕ヘ
ガ如キ、^一國、^一風、^一ニ由テ、^一或ハ用ヲ軍陣ニ爲シ、^一或ハ賊ヲ拿捕ス
ルノ助ケトナル、^一是所謂不負千ノ藥モ、^一之ヲ大用スレハ封
侯ヲ得タルガ如ク、^一一時ノ吟詠ニ出シ者モ、^一亦用ヲ爲ス
アリ、^一世ノ洋學者流、^一動モスレハ和歌ヲ以テ、^一昔時公家ノ玩
弄物ノ如ク言做スハ、^一太、^一ク、^一謬、^一レ、^一リ、^一ト謂フベシ、^一且ツ夫レ洋
ノ東西ニ論無ク、^一其言異ナリ、^一情ト雖モ、^一性情ノ感ヲ述ブルハ則
テ同シ、^一聞ク昔シ、^一唐ノ僧皎然トイヘル者アリ、^一韋、^一蘓、^一列ノ詩
風ヲ擬シ、^一其悦ビヲ得ント欲シ、^一數首ヲ示ス、^一韋、^一蘓、^一列、^一賞、^一セ、^一ズ、
因テ舊作ヲ示ス、^一韋、^一蘓、^一列、^一大ニ賞歎シテ、^一凡ソ詩ハ各自ノ得
所アリ、^一強テ人ヲ學ビ、^一其心ヲ悦バシメントスレバ、^一本色ヲ
失テ精巧ナラズト誡メシト云、^一況ヤ日本人ニシテ、^一唐、^一宋ノ

詩ヲ學ブハ、徒ニ法ヲ學ビ弊ニ倣フモノ、ミナルヲヤ、何
ゾ心情ヲ盡シテ遺憾無キヲ得ンヤ。嗚ニ自ラ其心情ヲ盡
ス充分ナラザル、何ゾ散久人ヲ感動スルニ足ランヤ。其
益ニ見ルアリ、尋常腐儒ノ僻見ヲ打破ス、卓識ト謂フベ
ナリ。而シテ齡既ニ八旬ヲ過ギ、古今集ヲ讀ム千遍、自ラ
スル萬首、五年ニシテ其功ヲ畢ハル、寫志ト謂フベキナリ、
世ノ齡未タ知命ニ至ラズ、而シテ近體ノ詩數百首ヲ作ル
ニ遊ギス、解ス可カラザルノ句ヲ綴リ、駁人約士ヲ以テ自
負スルノ徒、反省スル所ヲ知レ。

第十 太宰純管鸞峽ヲ規セシ文

太宰純、小字ハ彌右衛門、春基ノ孫ス、信濃ノ人ナリ、徂徠ノ
門ニ於テ、名聲一時ニ冠絶ス、其人トナリ、嚴毅方正ニシテ、

惟貞ニ對スルニ、信尾憚無シ、管鸞峽ト云、著アリ、才氣
貞年十歳ニシテ、權テラレラ、幕府ノ屬官ニ列ス、一時稱シ
テ奇童ト爲、然ルニ卒ニ苗ニシテ秀デス、春基之ニ規
政シテ、其志誠、勸トル、亦以テ勸ニシテ、
氣ヲハモ、規箴トスルニ足ルヲ以テ、其書ヲ譯ニテ、
ニ撮録ス、

純、足下ノ學ニ於ケル、觀ルニ、王公大人ノ學ヲ以テ、
ト爲シ、以テ日ヲ消スル者ノ如クナル、無キヲ得ンヤ、
夫レ足下ハ布衣ニ兼ス、雖氏、然カレハ儒生ナリ、不
ニシテ早ク神童ヲ以テ聞キ、幸ニ國恩ヲ蒙リ、
學ニ列シ、朝請ヲ奉ス、以シテ雖、以テ爲ムル所
ヲ知ラザル、可カラズ、古人童稱ニシテ、日ニ六藝古文、

予言、誦スル者アリ。純足下ヲ識ルヨリ以來、茲ニ數年、未ダ足下ノ誦スル所アリテ聞カズ。今日ヨリテ前年ニ較フルニ亦未ダ其進ム所アルヲ見テ、而シテ進ム所ノ者ハ吹笛ノ如シ。近來聲價頗ル減ス。豈ニ徒然ナラン。怪正叔言フアリ曰ク、人三不幸アリ。少年ニシテ高科ニ登ル。老ノ不幸トリト足下其レ請レテ思ヘ。又曰ク、吾子、冬ハ則チ霜雪ヲ畏ル。夏ハ則チ雷雨ヲ畏ル。一歲ノ内霜ト霜雪トヲ避ケレバ、則チ其畏ル無ク者幾シト稱ナリ。且語所謂首ヲ畏ル尾ヲ畏ル身其餘リ幾クゾト吾子之ニ告シ純聞ク、西域ニ無雷ノ國アリ、南方ニ八風ノ地アリ。吾子乃チ彼ニ生ニスシテ此ニ生ル。何ゾ造物ノ吾子ニ利ヲ与ヘルヤ。予ハ則チ以爲ク、吾子ノ慮深キハ衆ハ

ニ由ルト雖、氏亦豈ニ奉養大ダ厚ク安佚度ニ過クルヲ以テ自ラ其疾ヒヲ崇ムルニ非ズヤ。吾子少ナリト雖、氏幸ニ一タビ諸レヲ思ヘ。

櫻所子曰ク、世ニ奇童ト稱セラル、モ長ジテ後チハ平凡尋常。所謂苗ニシテ秀デガル者少ナシトセズ。是他無シ。其一科ヲ卒ヘ一書ヲ誦スルモ、隣里郷黨ノ稱譽スル所トナルヲ以テ、早ク既ニ驕慢ノ心ヲ生ジ。志氣自カラ換ケテ、亦勉強耐忍。積ムニ歲月ヲ以テスル能ハサルニ由ル。且ツ夫レ驕心ハ、人世百般ノ事業ヲシテ、軟弱委靡ナラシムルノ鴆毒ナリ。況ヤ幼齡ニシテ驕心ヲ生ズル代ハ、其精神懶惰ニシテ活潑ナラズ。安佚ヲ好ムテ勤苦ヲ欲セズ。終身ノ景狀ハ、宛カモ阿芙蓉煙ヲ喫スル者ト。相匹似スルニ至ラン。

豈其業ノ大成ヲ望ムベケンヤ。太宰春甚カ。菅崎嶼ニ忠告スル所ノ如キハ。世ノ才氣アル少年カ。頂門ノ鍼砭ニシテ。亦其苦學ノ志ヲ培養スルノ肥料ニ供スベキナリ。

第十三 吉益東洞貧窶ニシテ毫モ志ヲ折カザリシ事

吉益東洞本姓ハ富山氏。安藝ノ人ナリ。東洞少フシテ志氣アリ。以為ク我が遠祖政長ハ管領タリ。我天下ハ名族トシテ。豈再ビ家ヲ興サハル可ケンヤト。恆ニ兵法ヲ學ビ。馬ヲ馳セ。劍ヲ試ム。年已ニ長スルニ及ビ。自ラ以為ク。太平ノ世。武術ニ長セシトイフ。亦其技倆ヲ試ムル日無シト。是ニ於テ慨然トシテ誓テ曰ク。大丈夫良相トナラズンバ。當サニ良醫トナルベシト。遂ニ醫術ニ心ヲ潜メ。黽勉スル。丁歳アリ。日夜怠ラズ。業成テ後チ遠僻ノ地ニ在ル。疾ヲ救フノ功多ク。ラズ。業ヲ檢シ。引リ。ス。京都ニ移住セシ。善クバト。元文ニ午。家ヲ携ヘ。京都ニ移リ。仲景ノ治方ヲ唱フ。東洞京都ニ在リ。其業未ダ盛リニ行ハレテ。門生進ム。丁無シ。偶倫兒ノ賈ノ掠ノ上ルニ遭ヒ。家更ニ貧シ。其ト村尾某仕途ニ感リ。コトヲ勤ム。東洞可クテ曰ク。初メ我ト子ヲマコテ知已トリス。今ニシテ後子子ハ我ト知ルモノニ非ルヲ知シ。我ハ貧ニシテ且ク老親アリト。誰氏何ヤ志ヲ降シテ。辱ノ為メニ仕フルモ。ナラシヤ。貧ハ七ノ常ニシテ。窮道ハ命ナリ。假令我術行ハレズ。雖モ天嘗ニ斯道ヲ失ハサシヤ。ト而シテ家益貧ク。饑饉マハ。且クニ迫ル。東洞居然トシ。憂戚シ。其日某處。識ル。貧翁アリ。東洞が貧ヲ憐ミ。金若干ヲ與。東洞毅然トシテ曰。

功多ク。ラズ。業ヲ檢シ。引リ。ス。京都ニ移住セシ。善クバト。元文ニ午。家ヲ携ヘ。京都ニ移リ。仲景ノ治方ヲ唱フ。東洞京都ニ在リ。其業未ダ盛リニ行ハレテ。門生進ム。丁無シ。偶倫兒ノ賈ノ掠ノ上ルニ遭ヒ。家更ニ貧シ。其ト村尾某仕途ニ感リ。コトヲ勤ム。東洞可クテ曰ク。初メ我ト子ヲマコテ知已トリス。今ニシテ後子子ハ我ト知ルモノニ非ルヲ知シ。我ハ貧ニシテ且ク老親アリト。誰氏何ヤ志ヲ降シテ。辱ノ為メニ仕フルモ。ナラシヤ。貧ハ七ノ常ニシテ。窮道ハ命ナリ。假令我術行ハレズ。雖モ天嘗ニ斯道ヲ失ハサシヤ。ト而シテ家益貧ク。饑饉マハ。且クニ迫ル。東洞居然トシ。憂戚シ。其日某處。識ル。貧翁アリ。東洞が貧ヲ憐ミ。金若干ヲ與。東洞毅然トシテ曰。

ク我レ故無クシテ命ヲ受クベキニ非ズ。又是ヲ受クルニ
報ユルハ日無シ。賈翁之ヲ強テ曰ク吾同ノ僕トテ求ムル
者ナラシヤ。且ク先生ヲシテ凍餒ニ陷ラセシメシトス
ル者ハ世人ノ生命ヲ救済セシ者爲ラシト云フ。東洞其言ニ
感シテ之ヲ謝シ漸ルニ寒ヲ支ナレトシテ得タリ。幾クモ無
クシテ一人ノ病者ヲ診シ。藥劑ヲ授ヒシニ山股東洋其常
ニ在リ。大ニ其主方ニ的當ナレトテ賞讃ス。病者モ亦日
々シテ愈ム。東洞亦東洋ノ尋常トテ世ヲ知リ。學問之ヲ
交ハル。東洞ノ名ナリト世ニ顯著ス。年五十三ニシテ。親數方
藥。微方極。撰ミ專ニ古方醫ノ規律ヲ立シ。晚年ニ及ヒテ中
津候。保石百石ニ以テ召マシ。雖モ應ヒズ。而シテ世ノ成ハ
其術ニ信シ。或ハ之ヲ疑フ者アリ。然レ亦其方ヲ意トシテ安

永二年七トニニシテ歿ス、

櫻所子曰ク東洞ハ管領白山氏ノ裔ニシテ即チ名族タル
ニ由リ。奮然トシテ志ヲ起シ太平ノ世。武術ヲ施スニ所無
キヲ觀テ。刀圭ノ業ヲ以テ當時ニ鳴ラシメス。而シテ治マ
ルヒ業ヲ問フ者稀ニシテ。襟頭蛛網ヲ張リ。釜底塵ヲ堆ス
ルニ至ルモ。敢テ初志ヲ展抗セズ。遂ニ其名遠邇ニ喧傳シ。
重祿ヲ以テ招聘セララル。ニ至ルモ。亦敢テ利祿ノ爲メニ
節ヲ枉ゲズ。其誓フ所ニ背ムカズ。亦名族タルニ羞ムト
謂フベシ。夫レ始メアルコアリ。能ク終アルコト以キハ。社會
ノ通患ナリ。其志操ヲ持スル。東洞ノ如クナラシニ。終リ
テハニ度幾キカ、

第十四 杉山某明ヲ失シテ鹽ニ志シタル事

杉山某ハ遠江國濱松ノ人ナリ。十歳ニシテ明ヲ失ハ幼キヨリ天資豪爽ニシテ名ヲ天下ニ成サント欲ス。志アリ然レモ既ニ明ヲ失テ業トスベキ無シ。意ヲ醫術ニ決ス。甫、年十七、鍼鑿トナリ。江戸ニ赴キ、日夜其技ヲ研精ス。年ヲ累ホテ終ニ妙解ヲ得。其名大ニ著シ。四方治ヲ乞フ者、隣至難達シ。尉トシテ、軍工トナル。公侯大人招請處日無シ。將軍綱吉公之ヲ聞キ、召テ左右ニ侍セシム。一日公問フテ曰ク汝デモ亦欲スル所アリヤ否ヤ。對テ曰ク有り。臣一服ヲ得ニト欲スト。左右大ニ笑フ。公曰ク是レ戲言ト雖モ其一惻ム可キナリ。乃チ宅地方一町ヲ水所第一橋、側ニ賜ハ蓋シ俗此橋ヲ呼ビ、一日ト爲スヲ以テ、故ニ此命アルナリ。因テ祿スルニ五百石ヲ以テシ、檢校職、仕ス。又地ヲ京

師ニ賜ヒ、清原菴ヲ置キ、以テ天下警若ノ事ヲ總ム。某一專ラ救濟ヲ好ム。初メ貧キ時、尚ホ囊橐ヲ傾ケ以テ貧人ヲ贖ス。家道已ニ餘カナルニ及ビ、賑恤スル所極メテ多ク。警人ノ窮乏ナル者ニ放テ、最モ厚キヲ加フ。元禄七年ヲ以テ、江戸ニ及ス。京都江戸ノ警若流、某ノ徳ヲ仰キ、其像ヲ作テ之ヲ敬禮スルニ至ヒリト云ス。

櫻所子曰ク杉山某、十歳ニシテ明ヲ失フ。猶ホ朕々其志ヲ勵マシテ一技ヲ究ム。其身ヲ立テ家ヲ興ス。丁此ノ如シ。兩眼明カニシテ、秋毫ノ末ヲ察ルニ足ル者ニシテ、我レ能ク事業ヲ爲スニ足ラズトスル者ハ、自暴自棄スルニ非ズシテ何ゾヤ。

卷十五 谷玄圃明ヲ失シテ後チ詩學ニ志セシ事

谷玄圃公江戶及人申云、雕工ノ子ナリ、六歳ニシテ痘ヲ
病シテ明ヲ失ス、八歳ニシテ醫術ヲ學ビ、常ニ指ヲ以テ
ヲ掌上ニ畫シ、書傳ヲ記憶シ、日ニ萬言ヲ誦ス、十四五歳
シテ其技粗通人トシ、歳八時、服南郭ガ李攀龍ハ唐詩選ハ
講訖ス、心ヲ聞キ、詩ハ以テ醫術ニ換ヘ、鮮明諸家ハ詩ハ講
セテト云、人ヲ以テ之ヲ讀マシメ、又ヒ聽テ即チ記シ、年
ヲ終テ忘レズ、諸學生ノ解マシム能ハサル所、通曉ガモ敏ナ
リ、後今高蘭亭ニ從テ學ブ、而後明明ガ文選、揚七弘ガ音
高廷禮ガ書詩、高正鼻李攀龍ガ古今詩冊、李杜ハ全集ハ
類皆能ク之ヲ臨詠ス、事ヲ策シ古ヲ談ズル、殆ソト老博士
ノ如シ、人神仙ヲ以テ之ヲ目スルニ至ル、初メ高蘭亭ノ詩
ヲ以テ河内ニ傳ルハ、服南郭ト並ニテ海内ヲ旗鼓ニ一時

ヲ風靡ス、學稱神、間ニ詩甚タリ、蓋シニ家法ヲ世明
誦シ、高ヲ李玉ニ刻シ、格調整合、絶律森嚴ナルヲ以テナリ、
蘭亭歿シテ後、其門人皆玄圃ニ從テ、南郭特ニ耆壽ニシ
テ世ニ存シ、其赤羽橋ニ居ルヲ以テ、人之ヲ管測ト稱ス、公卿大夫ヨ
圓ハ萱葉坊ニ居ルヲ以テ、人之ヲ管測ト稱ス、公卿大夫ヨ
ハ以テ、青衿子弟ト、緇流黃冠トニ至ルマデ、皆クモ詩ヲ學
バント欲スル者、刺ヲ其門ニ修セザルハナシ、南郭歿シテ
後、玄圃特ニ蘭亭ノ高弟ナルヲ以テ、詞壇ニ牛耳ヲ執レ
リ、玄圃既ニ詞藻ヲ以テ關東ニ馳騁シ、聲價一世ニ高
錚也、無讓シテ常ニ謂ラク、予カ性聲音ニ拙ク、針線ニ拙ク、
明ヲ失スルノ後、其學者モル所、百事通ズル所無シ、惟詞
藻ノハ他技ニ比スベバ、敢々トシテ、線路ハ明カナルマハ

ハ、ト。其歿スル、後、門人遺稿ヲ編輯シテ六卷ト爲シ、
 藍水遺草ト曰フ。
 櫻所子曰ク、聞ク女間常ニ人ニ謂テ曰ク、諸君、視タル、而目
 アリ、然ルニ不慧ナルト斯クハ如シ、五官果シテ何ノ用ヲ
 カ之レ爲サシ、女間ハ六歳ニシテ明ヲ失シ、其學ヲ學ビ
 詩ヲ學ブ、遂ニ蘭亭南郭ニ次テ、詞壇ノ元帥タルニ至ル。實
 ニ我輩兩目炯然タル者ヲシテ、愧慙ニ堪ヘサラシム。然リ
 ト雖、比一瞽者ニシテ樹立スル所ナル猶ホ此ノ如シ、五官
 四肢、缺クル所無キ者、終身碌々トシテ、名ヲ成ス所無クシ
 バ、豈ニ獨リ心ニ愧トザラン、苟モ之ヲ限ツル氏ハ、速カ
 ニ奮勵シテ其志ヲ興起シ、女間ヲシテ、笑ヲ泉下ニ忍バシ
 ムルヲ勿カシ。

第十六 佐久間彦四郎年世六ニシテ學ニ志セシ事

佐久間彦四郎洞巖ト號ス、奥州ノ人、仙臺侯ニ仕フ、知
 テ聰慧、其父親重、京都ニ祇役ス、洞巖母兄ト家ニ在リ、書ヲ
 兄ニ學ビ、日夜勤習ス、十歳ニ及ブコト、數其兄ニ代テ簡牘
 ヲ書シ、父ノ許ニ贈致ス、爾、辭比事、人ノ指揮ヲ煩ハサズ、老
 成ノ手ヨリ出ルカ如シ、洞巖十四五歳ニシテ、頗ル繪事ハ
 好ム、而シテ師友無シ、畫本ヲ臨摸ス、研ムテ、山水ヲ畫ク、嘗
 テ僧、翠舟カ、江湖ハ闊ヲ觀テ、運筆ハ法ヲ悟ル、是ヨリ以降、
 畫ク所尤モ風致アリ、時ニ佐久間友徳ト云フ者アリ、又畫
 ニ巧ミナリ、仙臺侯ノ爲メニ寵遇セラレ、推デラレテ畫所
 ト爲ル、嘗テ洞巖ガ畫ク所ヲ觀、以テ甚ク奇ナリト稱シ、若
 コロニ親重ニ乞フテ、之ヲ養子トシ、其業ヲ継ガシム、時ニ

年十七遂ニ概百五十ヲ讀フ、洞巖妙年ニシテ書ヲ善ク
 シ又書ヲ善クス然カレ、屯學問ノ業ニ至テハ、未ダ嘗テ之
 コ學ハズ、歳三十六ノ時、人ノ爲メニ二喬ガ家ニ入リ、書ヲ
 讀ム、圖ヲ畫ガク、其人ニ喬ノ事ヲ問フ、洞巖喬ガ何人ノ婦
 ヲルヲ知ラスメ大ニ之ヲ憇チ、遂ニ遊佐次郎左衛門ニ從
 テ學ブ、經幾ヲ講習シ博ク、歴史ヲ究ム、遂ニ橋街ヲ以テ興
 羽ノ間ニ顯著ス、仙臺有、專テ朱子學ヲ尊信セシハ洞巖
 フ以テ噴矢ト爲ス、洞巖亦詩歌ニ巧ニシテ、新井白石ト情
 交尤モ密ナリシト云フ。

櫻前子曰ク、洞巖妙齒ニシテ繪事ヲ好ミ、師友無クシテ、造
 詣スル所アル者、豈精練深究ニ由テ得タル者ニ非ズ、其
 年知命ニ近キニ及ビ、初メテ學ニ志シ、遂ニ儒ヲ以テ興羽

ニ顯ハル、ニ至ル。是豈小成ニ安スル者ノ能ク爲ハリナ
 ランヤ。

第十七

小川信成勸學文ヲ臨撰シテ學ニ志セシ事

信成泰山ト號ス、江戸ノ人ナリ、幼ニシテ戲遊スル常ニ筆
 硯ヲ愛ス、苟モ寸帛尺紙ニ遇ヘバ、意ニ隨テ科斗蠅頭、字ニ
 似テ畫ニ似タルノ狀ヲ作ス、五六歳ニ至リ、頗ル字體ヲ辨
 ズ、安永中、松山敬和ト云者アリ、善書ヲ以テ聞ユ、嘗テ泰山
 ヲ見、嘆ジテ曰ク、斯兒凡ニ非ス、且ツ書オアリト、酒ヲ爲メ
 ニ、司馬温公ガ勸學ノ文ヲ書シテ、之ニ與テ、泰山臨撰シ、且
 ツ誦シテ、念ヲス、漸ク文意ヲ解シ、讀書ノ人ニ益アルヲ知
 リ、初メテ學ニ志アリ、時ニ年僅ニ七歳ナリ、父之ヲ喜ビ、業
 ヲ其親ニ善キ所ノ山本北山ニ受ケシユ、北山授クハ、ニ太

史公ハ文ヲ以テス。泰山受ケテ之ヲ讀ミ。項羽ガ書ハ以テ
 姓名ヲ記スルニ足ル。其ノ言ニ感スル所アリ。是レヨリ
 復タ臨池ヲ事トセズ。意ヲ決シテ書ヲ讀ム。其一タビ謁ヲ
 北山ニ執リシヨリ烈風大雨ト雖氏未ダ嘗テ師家ノ闕ヲ
 踏マズンバアラス。曾テ大ニ雪フル。一巨笠ヲ戴イテ之ニ
 赴ク。途未タ半バニ至ラズ。雪積リ笠重クシテカ之ニ勝ユ
 ル能ハズ。顛蹶シテ大ニ膝ヲ傷ツク。人憐ムデ之ヲ扶ケ。勸
 ムテ家ニ歸ラシム。レ肯ンゼス。遂ニ師ノ許ニ至リ。痛ク
 忍ビ業ヲ受クル。常ハ若シ比隣傳ヘテ美談ト爲ス。泰山
 稍長スルニ及ビ。斬然トシテ頭角ヲ見ハス。人ノ未ダ讀ム
 能ハザルノ書ヲ讀ミ。聞幽ヲ發伏シ。微旨ヲ推開セント欲
 スルヤ。其坐傍常ニ老。莊。晏。管。墨。列。呂。商。國。策。等ノ書ヲ置キ。

巡覽シ之ヲ讀ム。衍文錯簡。信屈脊牙。讀ミ難キニ遇フ。毎
 ニ之ヲ校究シテ其説ヲ解了セシレバ。則チ措カズ。秋玉山
 ガ校定スル所ノ墨子全書ハ。經說數篇ニ至テ之ガ句讀ヲ
 下ダス。缺ハズ。其訓讀ヲ闕ク。泰山發憤シテ之ヲ讀ミ。索隱
 攻微。前後ヲ貫串シ。墨子考六卷ヲ著シ。竟ニ墨子全書ヲシ
 テ。展卷瞭然タラシム。當時諸儒皆其墨子ニ大功勞アリ。フ
 稱ス。天明五年。泰山勞瘁ヲ病ム。テ歿ス。時ニ年僅ニ十七。病
 革ルニ至リ。手未ダ卷ヲ釋カズ。筆硯書帙枕邊ニ俱置ク。リ
 シト云フ。

櫻所子曰ク。太田錦城。泰山ガ著スル所ノ經子遺説ニ序シ
 テ曰ク。若シ此人ヲシテ今日ニ存在セシメハ。一代ノ儒宗
 當サニ此子ニ推スベシト。斯言溢言ニ非ルナリ。錦城ハ

泰山ヨリ長ズルヲ五歳ニシテ同ク北山ノ美疑藝ニ在リ
 シト云フ。泰山初メ勸學ノ文ヲ臨摸シ且ツ誦シテ學ニ
 志シ。太史公ノ文ヲ讀ムテ感悟スル所アリ。臨池ヲ事トセ
 ズ。烈風大雨ト雖ヒ敢テ師家ニ至ラズシテ休止スルコトヲ
 爲サズ。顛蹶膝ヲ傷クルモ痛ヲ忍ムテ業ヲ受クルニ至ル。
 七歳、幼童ニシテ其耐忍強勉ノ氣力ハ、莫カニ壯年血氣
 ノ人ニ勝サルコト遠シ。故ニ其書ヲ讀ムヤ人ノ未ダ讀ム能
 ハザルノ書ヲ擇ムテ之ヲ讀ミ、古賢ノ道ヲ明カニシテ、以
 テ後世ヲ裨ケント欲シテ、之ガ解説ヲ作クル、其刻苦勵精
 大患ノ其身ニ在ル、手卷ヲ釋カザルニ至ル、其世ニ在ル
 ノ志深切ナリト謂ツベシ。若シ泰山ヲシテ歐洲ニ生レシ
 ヲハ、波斯、古代ニ行ハレタル、漢、唐ノ文字ヲ讀ム、東洋ノ

學ヲ變セシ偉功ヲ以テ、獨リアンケテルチユベロンニ
 擅ニシシヤリシナラン、今ノ洋學者中、動モムレバ翻譯
 ハ價ヲ求ムルニ急ナルガ爲メ、原文ノ艱澁ニシテ、容易
 ニ解ズシ難キ所アレバ、之ヲ脫除シ、常ニ好ムテ文章ノ平
 夷ナル者ヲ擇ムテ、之ヲ抄譯スルカ如キニ比スレバ、大ニ
 逕庭アリ。歐洲ノ學ヲ鍊修スルノ徒、奮興勵精、能ク泰山ノ
 遺蹟ヲ追ヒ、世人ノ未ダ諱スル能ハザル書籍ヲ擇ムテ、之
 ヲ譯述シ、幽ヲ發シ、微ヲ闡カバ、以テ世ヲ益スル大ナラン、
 是我ガ熱望スル所ナリ。
 第十八 山中猶平告ゲズシテ、素朴ヲ離レン事
 山中猶平、天水ト號ス、伊勢ノ農夫ナリ、少アシテ學ヲ好ム、
 産業ヲ拙々シテ、意ヲ經史ニ專ラニスル能ハズ、因テ京都

遊學セシトヲ謀カレ其父許サズ遂ニ告グズシハ奔ル
 京ニ之キ偏私ク諸儒ノ間ニ遊ク一モ其意ニ足ルル者
 無シ遊水タ甚ク久シカテズシテ囊橐都テ盡ク窮苦得テ
 言ヲ可カラザルナリ然リト雖モ未ダ嘗テ水クモ初志ヲ
 折カズ學問益勉ム又江戸ニ至ル浪落萬狀備書シテ衣食
 ヲ給ス其窮先キヨリモ甚シ以テ憂ヒトセズ博ク諸名士
 三交ハル又其意ニ充足スル者ナシ嘗テ山本北山ヲ燈官
 某氏ノ家ニ見テ經義ヲ論辯ス大ニ喜ビ以テ宿望ヲ得タ
 リト爲ス費ヲ其門ニ執ル時二年二十三中山ハ二十九十
 リ是時北山業未タ盛ノラズ故僕ヲ買テ給使ニ當ツル
 百能ハズ北山躬自ラ適ニ當タリ大水ハ同塾ノ東方旗山
 以共ニ水ヲ擔ヒ薪ヲ伐リ其勞ニ服事ハ錢クモ無クシテ

才俊ノ士門下ニ幅廣シテ而シテ業ニ時ニ感シテ大水
 能ク之ヲ奨成スル尤モ多シ天水尤モ心ヲ盡シテ思
 ヲ構シ草ヲ起シ名物ヲ狀繪シ其微巧ヲ施シ俄頃ニ
 節ヲ成ス老成人ト雖モ之ト並セ駢スルノ節ハ以テ大水告
 ケズレテ御關ヲ出テタルヲ以テ人皆之ヲ尤カム大水
 今曰ク産ヲ治メ業ヲ濬フハ嫡弟ニシテ足イリ大丈夫將
 サニ爲スコアラントスルヤ其始メ多クハ産業ヲ事トセ
 ス事ヲ好ムテ然ルニハ非ス彼レ此レト輕重アリテ藝
 兩全ヲ得サレバナリ吾道義ヲ發揮シ名義ヲ維持シ上
 大人ノ心ヲ正シ下モ子弟ノ行ヲ率中往聖ニ繼ギ承傳ヲ
 啓クハ數頃ノ田ヲ耕マシ數斛ノ粟ヲ希カヒ幸ニ餘寒ヲ
 免ケレ扱テ糞土ト爲ル者ニ執與レゾヤ事業ノ大ナルハ

學問ニ若クハナシ。家ニ居テ修ク、千金ヲ致スモ、猶ホ其半
 一比スルニ足ラズ、矧ヤ其富貴必シモ、期ハ可カラサルヲ
 ヤト、天水年二十五ニシテ、青霞亭ヲ城東小街ニ築キ、生徒
 ニ教授ス、三十歳ニ至ルニ及ビ、其門ニ入ル者、前後總ラ五
 百餘人、井董堂、松浦篤所、大窪天民等、高名ノ士、皆其素寮、（中略）
 ヨリ出シ、寛政二年ノ春、疫ヲ病ムテ歿ス、年三十三、其精ヲ
 著述ニ専ラニスルヲ以テ、遺稿若干部アリ、
 櫻所子曰ク、天水ハ、草莽ノ一布衣、學ニ志シテ、窮苦スレバ
 少クモ其志ヲ屈セス、遂ニ大都ニ在テ門戸ヲ張リ、士大夫
 ニ敬慕スルノ地位ニ至ル、其大丈夫將サニ爲スアラシ
 スル云々ノ語、以テ其志ノ遠且ツ大ニシテ、ハ成ニ安ニス
 ル入ニ非ルヲ知ルニ足レリ、今世志ヲ學業ニ傾ク、千里復

ヲ負フテ都門ニ遊ハ、輩、囊底空竭シテ、窮苦如何トモスル
 能ハザルニ際セバ、頗ニ平生ノ志操ヲ挫折シ、後夕學業ヲ
 勉ムルノ念無ク、水ヲ擔ヒ木ヲ伐リ、自ラ炊爨ヲ執ルノ勞
 ニ服事スルヲ欲セズ、漫ニ衰爽ノ言ヲ放、ニシ、羸暮ノ行ニ
 換テ、粗暴至ラザル無ク、頗ル醜陋ノ態ヲ極メ、世ノ人ヲシ
 テ、言フ可クシテ行ハルベカラザル説ヲ目シテ、書生論ト
 呼ビ、鄙野ノ行ヒヲ目シテ、書生風ト稱スルニ至ラシムル
 者ハ、他無シ、其心裡堅忍不撓ノ志ヲ樹立セズ、刻苦進取ノ
 操ヲ保有セザルヲ以テナリ、吁、明治ノ昭代ニ生レ、口ニ自
 主獨立ヲ説キ、開化文明ヲ談ズルノ徒ニシテ、寛永時代ニ
 於ケル東海ノ一農夫、穡平其人ニ耻ル無キ者、幾千カアル
 第十九 石作貞十九ニシテ始メテ學ニ志セシ事

石作貞駒石ト號ス信濃ノ人同國福島ノ山村氏ニ住リ山
村氏ハ家子良由以テ文學ヲ好ミ駒石カ人タルヲ愛
シ。駒石ニ讀書ヲ以テス始メテ郷先生ニ從テ四書ハ句讀
ヲ受ケ時ニ歳十九ナリ其學ニ志シテヨリ僻邑ノ良師友
無キヲ憂ヘ明和三年ノ春執州東名ニ適キ南宮大猷ニ學
バシト請フ山村氏之ヲ許シ其給資ヲ學フシ以テ行カシ
ム駒石學ニ志ムハ晩キヲ悔イ日夜誦習シテ怠ラズ寢食
ヲ怠ルルニ至ル故ヲ以テ其學大ニ進ム三年ヲ如テ福島
ニ歸ル邑ノ子弟皆從テ之又學ブ者多シ是ヨリ山村氏愈
之ヲ敬愛シ終ニ室老ト爲リ治下ノ舉措其手ニ決セリ下
子ハ山村氏ノ學ヲ以テ其子トシテ其子トシテ其子トシテ
櫻所子曰ク年十九ニシテ始メテ四書ノ句讀ヲ受ク學ニ

志マ駒石ト謂フベキナリ然レモ日夜怠ラズ三四年ニシ
テ學ヲ成スニ至ル之ヲ行旅ノ客ニ曾テ陸路十里ヲ以テ
尋常旅客一日ノ行程トス而シテ以ク怠ル者ハ三五里ヲ
モ步行シ難ルミシト雖比晝夜兼行セバ二十里若クハ
三十里ヲ往クベキカ如シ運坂シテ底ラザレバ跛者ト雖
比猶亦數十里外ニ達スベシ健脚ナル者ト雖比路傍ノ花
ニ散リ城頭ノ酒ニ顛セバ一里ヲモ行クベカラズ人オア
リ不才アリ如ヨリシテ學ニ志スアリ弱冠若クハ中年ニ
シテ初メテ學ニ志スアリ其志ヲ起スニ遲速アリ其學ニ
通スルニ刻鈍アリト雖比學ヲ怠ラザレバ共ニ進請ム
ル所相殊ナルト無シ特リ學問ノ事ノミナラズ人世百ノ
事業皆然カラザルハナシ

第二十七 田邊希文孟子ヲ讀ズルヲ聞キ志ヲ立テシ事
 田邊希文晉齋ト號ス。元祿五年、京都仙臺侯ノ邸ニ生ル。晉
 齋幼ニシテ夙慧、一日、鄉先生ノ孟子ヲ講ジ、人皆大驚歎カ
 ル可シ。ハ章ヲ聞キ、忻然トシテ追慕ハ心アリ。謂テ曰ク、早
 夔伊周企及ス可カラザルガ若シ、其他ハ未ダ學ムテ至ル
 可カラザル者、ボラズト。其長ズルニ及ビ、經義ヲ以テ縉紳
 ハ間ニ稱セラル。晉齋京都ニ教授スルコト七年、其名特ニ著
 聞ス。仙臺侯其爲ス所ヲ喜ビ、召見シテ月俸三十ロヲ賜ヒ、
 別ニ門カラ爲サシム。儒官ト爲リ、仙臺ニ移居ス。其職ニ在
 ル二十年、其勞ヲ賞シ、米地入三百石ヲ加賜ス。禮遇甚ダ溥
 シ。幾クモ無クシテ、權テラレテ世子ノ傳トナリ。又四百石
 ヲ加賜ス。先キ、加フル所ト併セテ七百石。班中老ニ至ル。

其殊恩非常也。人君臣ハ遭遇ニ、アラズ夫レ仙臺ハ一藩ニ
 シテ、貴重ノ臣無キニ非ズ。又文學ノ位小シ、非ズ然レド
 晉齋ノ若ク出身シテ進ミシ者ハ、未ダ聞カザル所ナリト
 云フ。
 櫻所子曰ク、中江藤樹ハ、大學ノ天子ヨリ以テ庶人ニ至ル
 マテ帝ニ是レ身ヲ修ムルヲ以テ本ト爲スノ章ヲ讀ミ、其
 品行ヲ鍊修シ、遂ニ近江聖人ト稱セラレ、其德一地方ヲ薰
 陶シ、及後猶ホ里閭ノ崇敬スル所トナル。田邊晉齋ハ、孟子
 ノ人ニテ、魁傑タルベシ、ハ一章ヲ講ズルヲ聞キ、學ムマモ
 ベカラザルナシトシ、志ヲ勵マシテ學業ニ從事シ、遂ニ一
 大藩ノ中老ト班列スルニ至ル。而シテ尋常驥上ハ、日ニ一
 副仁義ノ道ヲ談ジ、六經ヲ誦ンズルニ至ルモ、終生碌々ト

シテ、人ノ後ヘニ在リ、龜魚ト伍ヲ同フスルノミ、讀ム所ノ書ハ則チ同一ニシテ、收ムル所ノ結業、此ノ如クノ差アル者何バヤ、曰ク唯志ヲ立ツルト否ラザルトニ在ルノミ、之ヲ鑿ノ藥劑ヲ調和スルニ譬フ、庸醫ノ之ヲ用ユルハ、ギナトモルヒホト雖ヒ、起死回生ノ功ヲ奏スルニ足ラズ、偶以テ患者ヲシテ夭折セシムルノ懼レアルノミ、而シテ良醫ノ之ヲ用ユルハ、牛渡馬勃モ善ク人ヲシテ壽域ニ墮ボラシムルノ材料トナルガ如シ、今ヤ開明ノ隆運ニ属シ、我輩ガ蒙ラザキ、我輩ガ頑ヲ廢ニシ、我輩ガ懦ヲ起スノ良藥、其料ニ乏シカラズ、希羅古賢ノ言行、得テ知ルベク、歐米前哲ノ論理、得テ聞クベシ、然リト雖ヒ、假令之ヲ知り之ヲ聞クモ、躬ニ行フハ、志無クンバ、恰カモ庸醫ニシテ、多クノ良

藥ヲ貯藏スルガ如シ、昔日ノ腐儒ト一輩ノ人々、リ幾ンド希ナク思ハザル可ケシヤ

第廿一 永富鳳介幼ニシテ古人ノ節ヲ慕ヒシ事

永富鳳介ハ、獨嘯菴ト號ス、長門ノ人、年十一ニシテ、古人ノ節ヲ慕ヒ、經史ヲ讀ムヲ好ム、既ニシテ、長師友無キニ、身ハ一夜、青錢百文ヲ持テ、赤馬關ニ走リ、舟ヲ買テ、鴨二東遊セントス、或人諭シテ曰ク、兒ハ實ニ兒ナリ、百錢以テ、千里ニ遊グ可キヤト、鳳介笑テ曰ク、子ハ乃チ何ゾ、迂ナル父母之ヲ聞カハ、人ヲシテ、追ハシムル必セリ、固ヨリ、遠遊ヲ計ナバ、ト遊ニ、京都ニ至リ、居ル、小期年、意ヲ得ズシニ、歸ル後、チ、嶽ニ至リ、山縣周南ニ師事シ、晝夜學マトシテ、讀書ヲ愛セ、群籍ヲ汲攬スル、丁、人ニ陪從ス、二十歳ノ時、京都ニ遊ヒ

始メテ山脇東洋ニ謁ス東洋其志ニ寓セシメテ其志ニ達ス
 鳳介始メ賢ヲ喜バズ東洋ノ言ニ感激シ志ヲ學術ニ專
 テニス鳳介東洋ノ門下ニ在ル其聲名早ク京都ニ著ルシ
 後十大段ニ僑居スルニ及ビ其業益益東洞ト推行シテ各
 聲遠邇ニ宣傳スト云フ

鳳介賢ヲ以テ業ト為スト雖ドモ其志ハ經世ヲ以テ自
 任ス其言ニ曰ク道ヲ學フハ志ナリ學ヲ行クハ業ナリ敢
 テ志ヲ以テ業ヲ廢セバ業ノ爲メニ志ヲ棄テス夫レ志ハ
 勉メザル可カラズ夫レ業ハ精メザリル可カラズト

櫻所子曰ク志アリト雖モ恆産無クレバ以テ其志ヲ成ス
 ニ足ラス業ニ精ナリト雖モ志シナクレバ解語ノ器械
 如シ志ニ勉メ業ニ精ニシテ真ニ有用ノ人タル可シ鳳介

其志ハ年僅カニ十一ニシテ決然郷關ヲ去テ良師友ヲ求

ム其業ハ海内學術ノ冠冕タリシ時亦偉ナル哉

傳世ニ宮瀬維翰乞食シテ江戸ニ入りシ事

維翰通稱三右衛門臨門ト號ス紀別ノ人ナリ寛保元年ノ
 四月箕ヲ負フテ江戸ニ赴ク驛舎ニテ晝ニ遣ヒ資銀ヲ喪
 フ乞食シテ關ニ入ル湯島常樂祠官某ノ家ニ寓スル寸
 年ニシテ後チ湯島切通坊ニ僑居ス窮迫殊ニ甚シ備書シ
 テ食ヲ給ヘ嘗テ贊ヲ眼南郭ニ委シ芙蓉社ニ入ル門下人
 士其能ニ好忌シ惡聲數臻ル是ニ於テカ快々トシテ望ミ
 ヲ失フテ引去ル退テ六經ヲ修メ敢テ世ニ交ハラズ名聲
 大ニ起ル門人益進ミ其業頗ル盛ナリ諸侯之ヲ聘スル者
 了月ト雖モ皆辭シテ起タズ當時文章家ト稱スル者ハ服

南郭餘無耳。一雅服。入龍門。名之。亞。久。ト云入。其經義ヲ
推ハ者ハ、太宰春盛宇瀨水ニ減ゼス。晩年ニ至テ交遊海内
ニ通ネシト云入。江戶ニ遊ブ。乞食シテ關ニ入ル。其都
門ニ寓スル。補書以テ飢寒ヲ支フ。之ニ加フルニ南郭ノ門
ニ入リ。同門ノ士ノ其能ヲ知シ。南郭亦讒聞ヲ信ジ。之ヲ
厭薄スルニ至ル。其困頓思フベキナリ。然ルニ龍門屹然ト
シテ其志ヲ屈セズ。終ニ一時ノ文宗タル。春盛南郭ノ名ヲ
齊ニスルニ至ル。今世學資ノ乏シキヲ訴ヘ。衣食ノ計ヲ爲
サザルヲ得ザルヲ以テ。暇ヲ織請ニ注ダ。餘暇無キヲ口
實トシ。良師友無キハ學ブコトヲ得スト爲ス所ノ青年ハ
是恰カモ遊手徒食ノ徒。資本無キヲ以テ。商業ニ從事シ難

シト爲シ。田畝ヲ有セザルヲ以テ農タルニ由リ。ト
坐シテ凍餓ヲ待ツト。大ニ異ナル。見ヨト來豪盛大
估。富コ陶猗ニ比スルニ至リシ者モ。其創業ノ祖ハ。僅以ノ
資本ニ過キス。一世ノ泰斗タル大博士。多クハ學資ナキ貧
賤ノ家ニ生レ。師友無キ荒僻ノ地ニ長ズ。然ハ則チ資本ナ
ク田畝無キヲ口實トシテ坐食スルモノハ。農商ノ産業ニ
從事スルニ志シ無キ者ナリ。學資無ク師友無キニ辭柄ト
シテ學バザル者ハ。學ニ志シ無キ者ナリ。然レハ則チ遊手
者ハ。就產ノ資無キヲ憂ヘズシテ。就產ノ志無キヲ憂ヘヨ。
無學者ハ。學資ト師友ノ乏キヲ憂ヘバシテ唯。就學ノ志無
キニ慨歎セヨ。苟モ之ヲ爲スニ志アラバ。何事カ成ラザレ
ンヤ。若シ然ラズトセバ。請フ古來豪富者ノ始祖ト盛名ノ

學七トヲ視ヨ。朱熹ノ所謂萬事成ラザル。須ク吾志ヲ責ム
トハ真ニ確言ナル哉。

第廿三 富士谷成章志ヲ專ラニシテ國書ヲ討究セシ
事

成章ハ層城ト歸ス。皆川淇園ノ弟タリ。幼一シテ敏慧群兒
ニ異ナリ。九歳ノ夏韓使來聘セシ時韓人ト筆談ス。其妙齡
ニシテ才氣アリ。應答ノ速カナル。韓人亦大ニ驚異セリ。長
ズルニ及び。汎ク群籍ヲ涉獵シ。自ラ以爲ク。近キヲ舍テハ
遠キヲ求メ。目ヲ賤ムデ耳ヲ賣フハ世人ノ常態ナリ。聖經
賢傳ト雖。凡外邦ノ事ハ。若カズ吾邦ノ典籍ヲ講習セハ
ニハト是ニ於テ國史律令ヨリ。家乘遠集ニ至ルマテ。遍ホ
ク搜探シテ。考覈セザルハ無シ。又國風ヲ學ヒ。其吟出スル

所萬首以上ニ至ル。其詩ノ賦不ルヲ能ク。一夜ニシテ五言
律百首ヲ作クレリ。又其咏物ノ詩。本邦ノ故事ノミツ用弁
唐土ノ故事ヲ以テ材料トセザルハ。新井白石カ。日本詩史
ニ載スル所ノ雪ヲ咏ズルノ詩ノ外。亦見ザル所ナリトイ
フ。其造詣スル所知ルベキナリ。今左ニ其翦ヲ咏スルノ詩
一首ヲ録ス。

開時織蟻巧。搗翅搗去。鷓鴣不發聲。大堰錦波春十里。弘徽
孺儀月三更。踏拱秀娃裁詞藻。按譜才郎禮而評。執自五線
琴七骨。由來枉得合歡名。

櫻所子曰ク。近キヲ舍テ、遠キヲ求メ、曰フ賤ムテ耳ヲ賣
フハ。社會ノ通弊ニシテ。善ク希臘羅馬ノ歴史ヲ讀ムズル
モ。我邦ノ沿革ヲ知ラス。徒ニ歐米ノ風俗ヲ尊信シテ。我邦

ノ習俗此二起駕スル者アルヲ覺トラズ、動モスレハ外人
狡猪詭智ノ罽二倣モ。我邦固有ノ良風美俗ヲモ、頑駭ノ弊
習ヲ併セテ、之ヲ棄擲シ玉石共ニ焚クニモ、トス。豈ニ
既然タラザルヲ得ンヤ。視テ佛人ハ、佛國ヲ稱シテ、歐洲文
明ノ中心トシ、英人ハ、英國ヲ稱シテ、地球最第一ノ國トシ、
米人ハ、其聯邦ヲ以テ、世界無比ト唱フ。其言稱、偏倚スルニ
似タリト雖、亦愛國ノ心衷、言外ニ溢ル。今世輕佻ノ士、動
モスレバ、歐米ノ文化ニ心酔シテ、自國ヲ輕視ス。何ゾ愛國
ノ心ニ乏シクシテ、遠ヲ求メ耳ヲ貴フノ甚シキヤ。吁、成章
ノ如キ、識見アル者ト謂フベキナリ。

第廿四 藤鈞寫生ノ妙訣ヲ自得セシ事

藤鈞字ハ景和。若冲ト號ス。享保二年、京都錦小路ニ生ル。家

商ヲ業トス。若冲、物ヲ好ム。家貧、所貯、以テ、
箇ヲ吝マズ。古畫若干ヲ購テ、之ヲ學シ、所稱、以テ、
學、其法、通ズ。自、以、爲、久、是、ハ、所、稱、以、テ、
學、其、法、通、ズ。自、以、爲、久、是、ハ、所、稱、以、
和、稱、以、學、其、法、通、ズ。自、以、爲、久、是、
大、昔、昔、也、所、以、成、此、也、所、以、成、此、也、
云、所、以、成、此、也、所、以、成、此、也、所、以、
吾、所、以、成、此、也、所、以、成、此、也、所、以、
り、我、亦、其、所、以、成、此、也、所、以、成、此、也、
今、所、以、成、此、也、所、以、成、此、也、所、以、
諸、所、以、成、此、也、所、以、成、此、也、所、以、
所、以、成、此、也、所、以、成、此、也、所、以、

所。物ニ以テ、其毛羽亦五彩ヲ施ス。先ヅ之ヨリ始ム
 七、取古ノ雜ヲ感下ニ畜養シテ之ヲ播種、銀鍊數年、遠
 東本國華樂羽毛鱗介ニ至ルマテ、寫生ノ妙ヲ得テ、
 法ヲ踏襲スル丁無シ、故ニ終生蕭索鬼神ノ畫カズ、其繪事
 之耽ル此ノ如クニシテ、生産ニ耽リテ以テ、家道零替之口
 ヲ盡シ糊スルニ至レリ、米一斗ヲ以テ一帖ニ換フ、故ニ自
 斗米志ト飾ス、

櫻所子曰ク、若冲ノ繪事ニ志ス、初メ和漢ノ古畫帖ニ就
 テ、習鍊多年、意ニ契ハズ、遂ニ碌々人ノ後ヘニ在ルヲ羞カ、
 更ニ寶物ニ就テ精研シ、以テ寫生ノ妙訣ヲ自得スルニ至
 ル、今世口ニ經世濟民ノ學、強兵富國ノ術ヲ談ズル、徒尚

小人ノ人ノ精粕ヲ哺ヒ、一隅ヲ待テ、前賢往聖ニ彷彿タル
 上ノ思ハズ、翻テ他ヲ罵テ、獨立自主ノ氣象ニ乏シ、ト為
 ス、何ゾ其願ノ厚キヤ、

第廿五 休翁晚年國歌ニ志ヒシ事

休翁、和泉國堺ノ豪商ナリ、茶儀ニ熟ヒリ、其奴僕ヲ遇ス
 ル骨肉ノ如クス、故ヲ以テ家道日ニ盛リ、或時京師ニ
 至リ、初メニ某大納言ニ謁ス、談國歌ニ及ブ、大納言曰ク、汝
 何歌ヲ學ベルヤト、曰ク、未ダ之ヲ學バズ、曰ク、然レバ我
 レ汝トニ語ラン、凡ソ一家ノ主翁トシテ、多クノ奴僕ヲ使
 役スル者ニシテ、心ヲ文雅風流ニ留ムル日無ケレバ、則チ
 其爲ス所偏固ニシテ、一片ノ和氣無シ、修身齊家ノ道ハ、手
 ヲ知テ和氣禮ヲ以テ之ヲ節スルニ非レバ、人服セズ、且

夫、い、心、の、爲、に、文、雅、ハ、心、無、く、附、風、ハ、何、物、タ、ル、モ、知、ラ、ズ、
亦、心、則、キ、終、無、ク、繪、ヲ、描、書、ハ、紙、亦、養、ハ、ハ、一、般、ニ、シ、テ、高、貴、
天、學、ハ、主、心、タ、ル、ニ、似、ズ、ト、休、翁、聽、テ、了、テ、信、且、ク、憤、ハ、心、
ナ、リ、即、チ、志、ハ、歌、學、ニ、傾、ケ、道、ニ、其、如、境、ハ、窮、ハ、シ、キ、リ、休、
翁、或、時、古、今、和、歌、集、ヲ、繕、ク、其、序、ニ、贊、之、ガ、康、秀、ノ、哥、ヲ、評、
安、樂、ノ、歌、ハ、美、服、ヲ、穿、チ、タ、ル、ニ、譬、ヒ、咏、マ、ル、所、ノ、其、人、タ、ル、ニ、
適、應、ヒ、ボ、ル、ヲ、歎、シ、レ、ル、コ、見、懼、然、ト、シ、テ、已、ハ、ハ、分、口、曉、ハ、
六、爾、後、復、々、身、ニ、縮、帛、ヲ、纏、ハ、ズ、一、家、衣、服、ハ、刺、ヲ、展、ニ、シ、羅、
綺、錦、緞、ハ、言、テ、ハ、待、タ、ズ、衣、帶、袋、柄、ス、ス、テ、木、綿、ヲ、以、テ、シ、尺、
十、八、寸、幅、綿、絲、ヲ、以、テ、織、成、ヒ、一、物、ヲ、需、用、ヒ、ガ、ラ、シ、メ、タ、リ、
其、兒、孫、ハ、及、ブ、マ、デ、家、道、以、ク、ト、衰、ハ、ビ、リ、シ、ハ、翁、ガ、儉、素、ノ、
風、ニ、遺、ニ、ヒ、シ、ニ、由、ル、ナ、ニ、

櫻所引曰ク、休翁晩年歌學ニ志シ、稍、其、堂、奥、ノ、穠、ヲ、而、シ、テ、
古今集ノ序ヲ一讀シテ、恕チ儉素以テ其分ヲ守リ、徳馨ヲ
兒孫ニ及ホスノ幸福ヲ得タリ、況ヤ經國濟世ノ學術ニ於
テ、ア、ヤ、苟、モ、之、ヲ、活、用、ヒ、バ、其、益、ヲ、得、ル、豈、童、ニ、休、翁、ノ、北、
ランヤ、

第廿六 糟谷半之丞篤志ニ由テ國風ニ長ゼシ事

半之丞ハ、參河國伊羅古ノ漁夫ナリ、村海中ニ半出シ、地昔
ナ白沙ニシテ、農作スベカラズ、闔村漁ヲ以テ生活ヲ爲ス、
半之丞家甚ダ貧シク、風ニ父ヲ喪ヒ、善ク母ニ事ス、孝、
曲ニ稱セラル、母嘗テ疾ム、之ヲ療スルニ效無シ、乃チ伊羅古
明神ニ禱ル、毎旦水ニ浴シ、裸跣往テ拜ス、祁寒酷暑若ハ風
若ハ雨、未ダ嘗テ一日モ廢セズ、會、旅客アリ、社ヲ仰ヒ、
廟

歌ノ國歌ヲ誦ス。半之丞問テ曰ク。誦スル所ハ何事ゾ。曰ク
和歌ナリ。曰ク。是レ上古神明ノ傳フル所ナルカ。將タ人ノ
作ル所ナルカト。客笑フ。曰ク。亦人ノ作ル所。曰ク。學
ムテ能ク。不可キカ。曰ク。然リト。因テ略其法ヲ授ク。且ツ曰
ク。歌ハ至誠ヲ以テ本ト爲ス。此ヲ以テ心ニ存シ。感觸シテ
言ニ發スルバ。以テ天地ヲ動カシ。以テ人神ヲ感ズベシト。
半之丞大ニ悦ビ。謝シテ還ル。茲レヨリ志ヲ國風ニ留メ。喜
悲笑驚凡ソ耳目觸ル。所心意動ク。所一ニ皆之ヲ詠歌ニ
發ス。半之丞本ト眼ヲ一訂無シ。故ヲ以テ意餘ル。アツテ言
達セズ。人傳テ以テ笑。實ト爲人。而シテ半之丞性ニ曰ク。
卒然法ヲ祠前ニ受ク。吾歌必ハ明神ノ眞贊ニ出ツ。然ノズ
ンバ吾儕鄙人。惡ンゾ能ク。斯ニ與カフンヤト。自テ信シテ。

疑。ズ。其天資朴直ナル。大率ホ此ニ類。村淡路守。戶田侯
封邑ニ係ル。代官某國歌ヲ善クス。其志ヲ嘉シ。昔ニ往
テ古歌ヲ講授シ。且ツ其詠ズル所ヲ剛正シ。爲一國守。書
シ與テ之ヲ擊バシ。居ル數年。詞稍修。ル。期滿ナテ代
官還ル。吉田驛藥舖ノ姫歌ヲ大納言芝山持豐一學。名旁
道ニ噪。久代官ニ繼テ詩誨ス。業大ニ進ム。其合作。至テハ
天趣高絶。古人及ビ易スカ。ラザル者。ナリ。或時姫。從テ京
都ニ至リ。大納言ヲ謁ス。試ミニ命シ。竇道總ヲ詠セシム。納
言吟誦數回。稱シテ曰ク。是ハ洵ニ純乎ナル。天籟自然。格
心。慮ヒ邪ハ無ク。非スシ。ハ何ヲ以テ。ハ之。ハ休カセ。ハ
圖ヲ。ガ小。知古。人ヲ。今世ニ。視ス。ハハ下。咨嗟。之。久。因テ
號ヲ。磯丸ト。賜。曰。爲ニ。之。ヲ。掄揚ス。名衣冠ニ。噴。々。リ。還ル。

及至道通傳稱シ以テ奇榮ト爲ス。大徳東下。及公卿
東海ニ過ズル者。往々過路其廬ヲ訪フ。名聲隆々トシテ
起ル。是ニ於テ上人相議シテ曰ク。吾土僧體ニテ衣冠親
臨スルハ未ダ嘗テアラス。而シテ今始ハテアリト云々
大ニ喜ビ而シテ敗屋陋室ナル亦土人ニ辱ナリト因テ力
テ我々モ貨ヲ捐テハ屋ヲ構ト之ヲ興フ。且以推シテ正
以爲ス。磯丸大ニ愕ト。堅ク拒ム。曰ク吾無能無識ニシテ
且寒族タリ何ゾ敢テ當ランヤト。衆強テ舍カズ。因テ里
正ヲ辭シテ其居ヲ受ケ。但洛流ノ過グル毎ネ此
延ク去ル事及バ輒キ鎖鑰シ。家ニ還テ漁具ニ修繕シ。兒
孫ニ事ニ從フ。未ダ嘗テ諷詠者以テ務ヲ廢セシ。磯丸殊
事畢リテ江ノ邊ニ遊ブ。公侯爭テ之ヲ延ク。遠藤但馬守新見

伊賀真二約尤モ之ヲ器異ス。常ニ二氏ノ邸ニ宿ス。木南文
高。高十春ト密友タリシトイフ。高十春ハ
櫻前子曰ク磯丸伴卿ハ寒族然カモ本ト丁字ヲ知ラズ。遂
ニ國風ヲ以テ名ヲ月卿雲客ノ間ニ揚グ。是レ其居心制行
正直ニレテ語黙動靜造次顛沛意志ヲ國歌ニ注キ其諷詠
スル所思ヒ邪マ無ク三百篇ノ作者ト其妙ヲ同フスル所
以ナリ。命意新ナリト雖氏措辭巧シナリト雖氏言前モ爲
節ニ出ガシバ假令太平ヲ狂點シ休明ヲ鼓吹スルノ一端
ニ供スベキモ何ゾ天地人神ヲ感動スルノ妙處ニ達スル
ヲ得シヤ。況ヤ假リテ以テ桃李ノ妖色ヲ賣リ花鳥ノ使音
ヲ通スルノ具ヲ爲スガ如キニ至テハ其風俗ニ害アル大
ナリ。磯丸ノ事其爲志ト至誠トハ以テ學術技藝ヲ講習ス

心者、模範ト爲ルベシ、豈ニ特リ國風ヲ示ナランヤ、
 第廿七、佐藤隆岷、葵章ノ衣ヲ被ルヲ誓ヒシ事、
 佐藤隆岷ハ會津ノ人、活菴ト號ス、少シテ志氣ヲ負ヒ、名
 不_レ知_レ下ニ成サハト、欲_ス其初_メ、鄉關ヲ出_ル、自_ラ誓_テ曰_ク、
 吾葵章ノ衣ヲ衣_スンバ、復_タ生_キテ還_テヌト、葵章ハ即チ
 幕府ハ徵_テ藩_ヲナリ、江戸ニ來_リ故人某ニ依_ル、某ハ賈人ナリ、
 專_ラ會計ヲ事トス、隆岷久シカラズシテ乃チ去_ル、然レ氏
 常居無_シ、處士ヲ以テ高門雅子ノ家ニ客タリ、喜_ムテ書ヲ
 誦_ル、易論語老莊、傷寒論、古今和歌集ヲ背誦_ス、長_ク軒岐氏
 ノ術ヲ好_ム、其術ヲ於テ自得_{スル}所ナリ、然レ氏其性善ク
 罵_ルヲ以テ、世人爲ニ容_テレズ、僅カニ按摩ヲ業トシ、以テ
 活ヲ爲_ス時ニ必_ズ留_テ酒酒店_{ナリ}、鰻、魚ヲ以テ名アリ、每暮

客三人アリ來_リ喫_ス、鰻一、酒一、銚是ノ如クスル者數_ニ
 未ダ嘗_テ一タモ之ヲ廢_セズ、主人陸ムテ之ヲ問_フ、皆云_フ
 吾輩風志アリ、成_ラザルヲ恐_ル、故ニ此ニ藉_リ、以テ氣_カヲ
 助_ケルハ、ト、三人其ニハ行商其一ハ隆岷ナリ、之ニ久_ク
 シテ隆岷一屋ヲ芝濱ニ僦_シ、既ニ屋值ヲ與_フ、屋主更ニ酒
 資ヲ索_ム、應_ゼズ、則チ中ルニ冷語ヲ以テス、隆岷大ニ怒_テ
 之ヲ罵_ル、偶_ニ任_ハ某ノ過_ギ觀_ルアリ、曉諭兩解_ス、遂ニ隆岷
 ヲ引_テ歸_リ、款待甚_ダ至_ル、某多ク拳勇少年ヲ養_ヒ、歸_シテ
 宛分ト曰_フ、是ニ於テ人ニ告_ゲテ曰_ク、吾奇兒ヲ得_{タリ}ト、
 隆岷之ヲ聞_キ罵_テ曰_ク、吾豈ニ汝輩ノ養子タルモノナラ
 シヤト、某謝_シテ留_ム、肯_ンセズ、袂ヲ振_テ去_ル、初_メ荒川土
 佐守ノ妻、疾_ムト十餘年、醫藥一効無_シ、隆岷ヲシテ之ヲ診

セシメ。武ニ處劑如何ト問フ。隆岷忽チ罵テ曰ク。若ハ、
人ニ非ズ。烏ソ、醫術ヲ知ラン。然レモ、吾ガ術、
爲ニ倍セラレズ。亦愧ルニ足ル。即チ拳ヲ奮テ、藥籠ヲ
打破シ。依然トシテ去テ。顧ミス。土佐守曰ク。奇士ナリ。術モ
亦應サニ奇ナルハ、シト。乃チ疾ヲ治セシム。遂ニ痊ユ。然ル
後チ、鎌名大ニ發ス。土佐守清水府ノ老ト爲リ。及ビ、建白
シテ、其待望ト爲ス。是ニ於テ、隆岷、藥章ノ衣ヲ賜ヒ、果シテ
其誓ヒラ遂ク。向キノ二商モ亦各、其志ヲ成スト云フ。
櫻所子曰ク。舊幕ノ時、藥章ノ衣ヲ服スル。未ダ、駟馬ノ車ニ
比スベキニアラザルモ、亦以テ衣錦ノ榮ニ視ラフベシ。隆
岷、東陣ノ一布衣ニシテ、其郷土ヲ去ル。藥章ノ衣ヲ衣ズン
バ、後々主遷セザルヲ誓フ。其志ヲ立ツル小ナリト謂フベ

カラズ、而シテ其性善ク罵ルモノ、固ヨリ美談ニ非ズト雖
比之ヲ門ヲ掃シ、塵ヲ掃シテ、俸給ヲ得ントスルニ及タズ
ル者ニ比スレバ、固ヨリ日ヲ同フシテ論ズベキニ非ズ。且
ツ人ノ爲メニ知ラレズ、按摩ヲ以テ生計トスル。數年ノ人
キニ及ブガ如キ、亦耐忍ノ至レルモノニアラズ。其獨介
ニシテ世ニ阿ラス。言行ノ奇ナルヲ以テ、遂ニ芥川土佐守
ノ知ル所トナリ。藥章ノ衣ヲ衣ルノ誓ヲ遂グルニ至ル、亦
奇遇ナリト謂フベシ。我便、後チ以テ榮華ヲ博セントスル
者アルヲ視ル。而シテ、獨介ニシテ、日ツ善ク罵ルヲ以テ、判
違ヲ得ル者ハ、隆岷ニ放テ始メテ之ヲ視ル。是蓋シ其心、
ト勉耐トシ、尋常ニ超出スル方致ス所ナリ。
第廿八 山岡純一郎志ヲ槍法ニ專ニシタル事

山岡紀一郎靜山ト號ス。江戸ノ名家世蕃府ニ仕テ其入トナリ剛直ニシテ阿ネテズ。朴素ヲ重シ氣節ヲ尚トシ。山幼キ時刀槍射騎水泳讀書書字發憤勉勵セザルハ無ク年十九ノ時省悟スル所アリ慨然トシテ曰ク我レ今ヨリ精ヲ專ラニシ槍ヲ學バンハトト。二十二歳ニ及ビ名番下ニ轟ク用ユル所ノ長槍必心槍ト曰フ其勝管丞相道真ヨリ出ツト云是時ニ當リ筑後ノ人内重紀介技ヲ以テ海内ニ鳴ル靜山就テ問フ南里將サニ國ニ歸ラントスルハ靜山ト一タビ較ベ以テ訣別ヲ告ゲント欲ス。是ニ於テ試法ヲ相較ス辰ニ起テ午ニ至ル神出鬼没輪贏未ダ判ゼズ。操ル所ノ各槍鋒尖摧破シテ寸餘無シ以テ靜山ノ技當時ノ槍術者流ガ精神活潑ノ妙機ヲ失シ血戰ノ實境ヲ遺レ徒

ニ花法美觀ヲ努ムル者ト相同シケラザルハ其ハ一也。一ノ常テ有テ鼻下ニ發ス痛甚シ技ヲ摧ル常ハ如此。殺之ヲ止ムレハ難カズ月餘ニメ愈ユ又鼻ヲ患ハ則此心毎ニ密ニ入テ第子ト技ヲ較ハ此ヲ以テ強ヲ去ル。靜山操ル所ノ木槍重サ四斤ナル者七斤ナル者十五斤ナル者アリ其槍ヲ學バ熟張凡ニ非ラズ常テ昇平日久ヲシテ士風ノ感化ナレテ慨シ自ラ古ノ士ニ企及セントテ期シ。護身用ニ應シテ國難ニ徇ヒ以テ士職ヲ盡サンコトヲ庶幾スルヤ。屢冬寒夜繼ヲ以テ腹ヲ刺シ氷ヲ融キ水ヲ灌ギ。灌身泳渡タリ。東ニ向テ日光兼ヲ拜シ叩首默禱。翌日湯ニ入り。其力ハ槍ヲ操リ突進ノ氣ヒヲ作ス。ト一千四百三十夜ヲ極メテ止ム。毎午此ノ如ク。卓屋晝ハ兩人ニ教授シ夜ハ則テ夜槍ノ

執ヲ作ス丁三千。或ハ五千。或ハ八五千。或ハ黄昏ヨリ雞鳴ニ至ルマデ。
三萬ニ及テ、嘗テ竹七八尺許リヲ斫リ之ヲ把リ高懸テ塔
山テ弟子ト試戦ス。推ニ異ナラズ。或ハ鐵扇ヲ搥リ以テ招
手ニ敵ス。靜山技術既ニ神妙ト稱ス。又徳義ヲ以テ後ニ嘗
テ西郊ノ佛寺ニ賽ス。衆アリ二十人バカリ。一人ヲ選號シ
津渡交下ル。鮮血淋漓々死ニ垂ントス。靜山衆ニ謂テ曰ク。何
物ノ狂奴ゾ。敢テ歐擊ヲ行フト。地ニ僵ル。者。哀叫シテ曰
ク。山岡先生請フ我ヲ救ヘト。靜山衆ニ與シテ懇諭スレバ
聽カズ。是ニ於テ群中ニ突入シ。喝シテ曰ク。窮鳥悛ニ入ル。
猶夫救サズ。此ヤ士人ノ敵ヒヲ求人。而シテ我豈坐視スル
ニ忍ビシヤ。カガノ敵ハ即チ我ナリ。請フ來テ我ト戦ヘト。
衆敢テ血カス。靜山地ニ僵レタル者ヲ視レバ。乃チ奮ト臂

テ贊ヲ執リ技ヲ習ヒ。後チ背キ去リシ者ナリ。其人金ヲ衆
ニ借テ還サズ。故ニ今此厄ニ遭フ。靜山金ヲ懷ニ取り其負
債ヲ衆ニ償ヒ。別ニ數金ヲ取テ其人ニ與ヘ規箴ヲ加ヘテ
之ヲ遣ル。靜山嘗テ人ニ語テ曰ク。凡ソ人ニ勝タント欲ス
レバ。須ク先ゾ徳ヲ已レニ修ムベシ。徳勝テ敵自ラ強ス。是
チ之レ真勝ト爲ス。若シ技藝ハ擊刺ニ由テ得可シト謂ハ
バ。則チ大ニ謬レリ。技ニ精シカラント欲スレバ。須ク先ゾ
飲酒遊行ヲ禁スベシ。必ヤ時トシテ精神ヲ技ニ存セザル
ハ。無ク往クトシテ着實事ヲ行ハザルハ。無シ。則チ奴境ニ
臻ル疾幾ス可キナリト。又曰ク。人ノ宜ク戒ムベキ者ハ驕
傲ナリ。一驕心ニ入レバ。百藝皆廢ス。既往ヲ回視スレバ。我
モ亦免カレズ。一念此ニ至ル毎ニ。慚汗背チ浴ホスヲ覺ニ

平化大、リト、安政二年六月、暴カニ歿ス、年二十七、其歿スルニ先ダツ一日、母氏、靜山ノ重捨ヲ使フヲ視、其太ダ憊ル、子患フ、靜山曰ク、兒之ヲ操ル手捨ト異ナル無キナリト、翌日、曉ヨリ、諸弟子ト操習スル常ノ如シ、但、肉色頗ル白ク、肌膚澤無キヲ見、弟子以テ告ク、靜山笑テ言ハス、是日ニシテ卒スト云フ。

櫻所子曰、吾人市村水香ガ釣魚記ヲ讀ム、其文ニ曰ク、吾家、澱江ニ瀕ス、江ニ一漁者アリ、釣鯉ニエミナリ、他人及ブ能ハズ、吾嘗テ其術ヲ問フ、漁者曰ク、他無シ、專ト精トニ在ルハ、ミ、初メ余ノ釣鯉ヲ學ブヤ、終日ニシテ一ヲ獲ズ、是ノ如キモノ、數十日退テ之ヲ思フ、曰ク、是餌ノ香シカラザルナリ、器ノ良カラザルナリト、乃チ其餌ヲ香バシフシ、其釣ト

竿トヲ良クシ、往テ釣ル、又獲ル所無シ、是ノ如キ者、數十日、退テ再ビ思フ、曰ク、是レ徒ニ餌ノ香バシキノミ器ノ良キノミ、未ダ其方ヲ獲サルナリト、是ニ於テ晨起、江ニ到リ、左視右顧、水ノ深淺ヲ測カリ、鯉ノ游泳ヲ窺テ、釣ル須臾ニシテ大鯉魚アリ、撥刺トシテ、釣ニ上ホル、是レヨリ復タ虚働無シ、世ノ江ニ釣ル者、鯉ヲ釣テ獲ルハ、輒チ去テ、鯉ヲ釣ル、鯉ヲ獲サレバ、輒チ去テ、鯉ヲ釣ル、終ニ一ヲ獲ル能ハズ、是豈釣魚ニ拙キノミナランヤ、其心事ヲニシテ思ヒ、精ナラザレバ、ナリト、吾之ヲ聞テ、感ズル所アリ、世ノ藝ヲ學ブ者、書ヲ學ムテ成ラザレバ、輒チ去テ、文ヲ學ビ、文ヲ學ムテ成ラザレバ、輒チ去テ、詩ヲ學ビ、書ヲ學ブ、其心專ラナラズ、思精ナラザルト、是ハ如ク、宜ナル哉、其成ル所無キマ、云々

我此文ヲ讀ムテ以爲ク斯言ヤ以テ能ク今世人士ノ膏
育ヲ登スルニ足ル者ニシテ韓昌黎ノ所謂外慕業ヲ徒ス
者ハ皆其堂ニ造タラス其歳ヲ齊ハザル者ハト人意ニ
符合ス實ニ警世ノ文字ナリト然ルニ靜山年僅カ二十九
ニシテ早ク已ニ茲ニ見ルアリ讀書習字射騎水泳ノ諸科
ヲ令テ、專ラ槍法ノ一技ヲ攻ム卓見ト謂フベキナリ一
藝アル人ハ皆ト語ル可シトイフ亦宜ナル哉今世ノ少年
才子カ朝夕ニ英籍ヲ翻ヘシタベニハ佛籍ヲ繕キ時トシ
テハ漢籍ヲ學ビ又ハ會獨ノ語學ニ轉ジ暇アレバ則チ書
法ヲ攻メ畫水ヲ被キ碁局ニ對シ百藝悉ク通セント欲シ
テ一トシテ其堂ニ造ル能ハズシテ身ヲ終ハルコト曉ト
ラサレカ如キ靜山ト漁人ノ爲ニ笑ハレザル者幾ンド希

ナリ且夫靜山カ其德勝テ敵自カラ屈ストイヒ技ニ精ナ
ラント欲スレバ須ク飲酒遊行ヲ禁ズベシトイヒ一騎心
ニ入レバ百藝皆廢ストイフカ如キハ蓋シ實踐ニ得ルカ
ノ言ニシテ古賢前哲ノ訓誨ニ密合ス亦以テ一技一藝
長セント欲スル者ヲシテ其品行ヲ慎シマシム其驕慢ノ
體操ヲシテ低クカラシムルニ足レリ而シテ其勉強刻苦
少クモ懈ラザル攻スルノ日ニ及ブマデ重槍ヲ揮ヒ諸第
子ト操習セリトイフカ如キ後進ノ士ヲシテ一讀ノ下ニ
感發奮興スル所アフシム吁靜山亦豪傑ノ士ト謂フベキ
ナリ

第廿九 藤田城卿年弱冠ヲ踰エテ學ニ志セシ事

幕府政ヲ失フノ時ニ當テ尊王攘夷ヲ首唱セル所ノ傑士

先後就テ起ル、而シテ海内ノ士、人オヲ論ズル者、先ヅ指テ
 藤田東湖ニ屈ス。東湖ハ甲子斌卿ノ號ナリ。斌卿ハ常陸ノ
 人世、水戸藩ニ仕フ。斌卿幼ニシテ奇穎、稍長シテ武藝ヲ嗜
 ミ、甚ダ讀書ヲ喜バズ、日一馬ヲ馳ヒ劍ヲ試ム。年弱冠ニ踰
 工、慨然トシテ自ラ奮テ曰ク、絳灌文無ク、隨陸武無キ。古人
 ノ笑フ所、文夫何ゾ學バザランヤト。遂ニ刻苦書ヲ讀ミ、父
 ノ喪ヲ守ル。進物番ニ補シ、藝考錄編修ト爲リ、總裁ノ事ヲ
 攝ス。斌卿書ヲ總裁ニ致シ、館中ノ五事ヲ論ズ。文辭雄健ナ
 リ、人始メテ其カヲ學ニ事ラニセシコトヲ知ル。黃門齊昭ノ
 初メ封ヲ襲フ。斌卿ノ異オアルヲ知リ、擢テ、郡奉行ト爲
 ス。三々ビ遷テ側用人ニ至リ、馬廻番頭ニ班ス。侯方ニ一藩
 ノ人オヲ網羅シ、内外ニ布列シ、皆號シテ職ニ稱フト爲ル。

而シテ古今ニ通ジ、車體ニ達スルニ至テハ、則チ斌卿益シ
 之ガ冠タリ。故ニ侯ノ春遇尤モ渥シ、入テハ則チ機密ニ參
 與シ、出テハ則チ四方ニ應對シ、議論風生ジ、事留滯無シ。侯
 新令ヲ出ス毎ニ斌卿一ニ筆ヲ秉リ、頃刻ニシテ成ル。辭理
 明暢トリ、當時水藩文武ノ士、其人ニ乏シカラズト雖也。斌
 卿ヲ推シテ全オト爲ス侯ガ施爲人ノ意表ニ出デ、人ノ目
 目ヲ驚カセシ者。斌卿尤モカアリトス。弘化元年斌卿罪ヲ
 獲テ、小梅村ノ別墅ニ屏居ス。爾後專ラ學ヲ攻メ、詩書ヲ覽
 閱ス。數歲ニシテ鄉里ニ歸ルヲ聽ルサレ、尊テ亦親故ト往
 來スルヲ得、遠近教ヲ乞フ者、日ニ門ヲ填ム。嘉永六年、侯命
 ヲ幕府ニ受テ、防海ノ政ヲ議ス。乃チ斌卿ヲ召ス。江戸ニ至
 テ原職ニ復ス。天下風采ヲ相望ス。而シテ斌卿風トニ尊擢

大義ヲ主張ス、然レモ持論トスル所、或ハ時ト牴牾ス、
 雖モ報國ノ誠ハ則チ確然トシテ撓マズ、候又執卿カ才文、
 武ヲ兼ヌルヲ以テ命シテ學政ヲ總督セシム、幾クモ無ク
 江戸地大ニ震フ、城卿是日ヲ以テ歿ス、享年五十、即チ安政
 二年十月ナリ
 櫻所子曰ク、東潮ガ尊攘ヲ主唱シ、名聲一時ニ甲タル者、常
 ニ異能ノ士ヲ延キ、酣暢談論シ、時ニ或ハ詩賦唱酬詞采煥
 發、能ク憂國ノ志士ヲシテ一讀ノ下ニ切齒扼腕セシムル
 者アルニ由レリ、而モ其學ニ志スハ、弱冠ヲ踰ユルノ後ニ
 在リトス、年已ニ長シタルヲ以テ、學ブ能ハズト謂フ者、何
 ズ慨然トシテ自ラ奮ハザルヤ。
 日本立志編卷ニ終

明治十二年十一月十五日 版權免許
 全 十五年三月廿五日 再板御届
 全 十五年七月廿一日 三版御届

著述者

福島縣平民

千河岸貫一

東京府下芝區烏森町
 壹番地寄留

出版人

大阪府平民

吉岡平助

府下東區備後町四丁目
 三十七番地

出版人

全

前川善兵衛

全 東區南久寶寺町
 四丁目八番地

